
東 松 山 市

代正寺Ⅲ／大西Ⅲ

県道岩殿観音南戸守線建設工事事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告

2 0 1 3

埼 玉 県

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県は、「安心の確立、成長の実現、そして自立自尊の埼玉へ」の基本理念のもとに、県民の安心・安全の確保や利便性の向上、産業の活性化などを目指し、道路など社会基盤の整備を行っています。

東松山市内に計画された、県道岩殿観音南戸守線バイパスの整備工事もその一環であります。事業地内には、これまでの発掘調査によって、弥生、古墳、平安時代の大規模な集落跡である代正寺遺跡や大西遺跡が存在することが知られています。今回の調査は埼玉県東松山県土整備事務所の委託を受け、道路整備のための事前調査として当事業団が実施いたしました。

発掘調査の結果、弥生時代から古墳時代前期（2000～1600年前）の住居跡や方形周溝墓、平安時代（1200～1100年前）の住居跡が発見されました。火災を受けた平安時代の住居跡からは、多量の灰釉陶器や緑釉陶器、「大田」の文字が刻まれた石製紡錘車が出土し、地域の中心的な集落であったことが分かりました。

本書は、これらの発掘調査の成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、埼玉県東松山県土整備事務所、東松山市教育委員会並びに地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成25年3月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 中 村 英 樹

例言

1. 本書は東松山市に所在する代正寺遺跡第8次調査及び大西遺跡第13次調査の発掘調査報告書である。

2. 遺跡の略号と代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

代正寺遺跡第8次調査（DSJ8次）

埼玉県東松山市大字宮鼻字代正寺76番地3他

平成23年10月5日付け教生文第2—53号

大西遺跡第13次調査（ONS13次）

埼玉県東松山市大字黒部16番地他

平成23年10月5日付け教生文第2—46号

3. 発掘調査は、一般県道岩殿観音南戸守線建設工事業に先立つ埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、埼玉県県土整備部道路街路課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4. 各事業の委託事業名は、下記のとおりである。

発掘調査事業（平成23年度）

「社会資本整備総合交付金（改築）工事（埋蔵文化財発掘調査業務委託）」

整理報告書作成事業（平成24年度）

「社会資本整備総合交付金（改築）工事（埋蔵文化財発掘調査（整理）委託）」

5. 発掘調査・整理報告書作成事業はI—3に示

した組織により実施した。

発掘調査は、平成23年10月3日から平成23年12月28日まで実施し、瀧瀬芳之、岩瀬譲が担当した。

整理報告書作成事業は、平成25年1月4日から平成25年3月29日まで実施し、福田聖が担当した。平成25年3月25日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第402集として印刷・刊行した。

6. 発掘調査における基準点測量は、東松山測量設計株式会社に委託した。

7. 発掘調査における空中写真は、中央航業株式会社に委託した。

8. 発掘調査における写真撮影は瀧瀬、岩瀬が行い、出土遺物の写真撮影は福田が行い、赤熊浩一、大屋道則の協力を受けた。

9. 出土品の整理・図版作成は福田が行った。

10. 本書の執筆は、I—1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が、その他を福田が行った。

11. 本書の編集は福田が行った。

12. 本書にかかる諸資料は平成25年4月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。

13. 発掘調査や本書の作成にあたり、東松山市教育委員会をはじめ、関係機関の皆様から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします。

凡例

1. 遺跡全体におけるX・Yの座標は、世界測地系、国家標準平面直角座標第IX系（原点北緯36°00'00"、東経139°50'00秒）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位は、全て座標北を指す。

B-3グリッド北西杭の座標は、X=-89.999m・Y=-38790.000m、北緯35°59'54"・東経139°24'11"である。

2. 調査で使ったグリッドは、国家標準平面直角座標に基づく10m×10mの範囲を基本（1グリッド）とし、調査区全体をカバーする方眼を設定した。
3. グリッド名称は、北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット（A・B・C…）、西から東方向に数字（1・2・3…）を付し、アルファベットと数字を組み合わせて呼称し、B-5グリッドと表記した。

4. 本書の本文・挿図・表・写真図版に記した遺構の略号は、以下のとおりである。

SJ…竪穴住居跡 SD…溝跡

SK…土壇 P…ピット・柱穴

5. 本書における挿図の縮尺は、以下のとおりである。但し、一部例外もあり、それについては図中に縮尺とスケールを示した。

全測図 1/300

遺構図 1/60・1/30

遺物実測図・拓本 1/4・1/3

土製品・金属製品・石製品 1/3・1/2・1/1

6. 遺物実測図の表記方法は以下のとおりである。

断面黒塗りしたものは須恵器。また、赤彩された土器は、その範囲に網10%をかけて示し、施釉陶器には釉の範囲を網（灰釉30%、緑釉50%）で示した。

7. 遺構断面図に表記した水準数値は、全て海拔標高（単位m）を表す。

8. 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。

・器種は弥生土器→弥生、土師器、須恵器、須恵系土師質土器→須恵系土師と表記した。

・遺物計測値の土器はcm、石製品はcm、重さはgを単位とする。

・土器計測値の（ ）は復元推定値を示す。

・胎土は特徴的な鉱物等を記号で示した。

A：雲母 B：片岩 C：角閃石 D：長石
E：石英 F：軽石 G：砂粒子 H：赤色粒子
I：白色粒子 J：針状物質 K：黒色粒子
L：その他 M：チャート

・焼成は良好・普通・不良の3段階に分けて示した。

・残存率は図示した器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。

・備考には出土位置、注記No、赤彩の有無、煤の付着、推定される須恵器産地等を記した。

9. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行1/50000地形図、東松山市都市計画図1/2500を編集・使用した。

10. 文中の引用文献等は、（著者 発行年）の順で表現し、その他の参考文献とともに巻末に一覧を掲載した。

目次

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	V 大西遺跡の遺構と遺物	21
1. 発掘調査に至る経過	1	1. 住居跡	21
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	2. 方形周溝墓	41
3. 発掘調査・報告書作成の組織	2	3. 井戸跡	45
II 遺跡の立地と環境	3	4. 溝跡	46
1. 地理的環境	3	5. 土壌	49
2. 歴史的環境	4	6. ビット	52
III 遺跡の概要	7	7. グリッド出土の遺物	53
IV 代正寺遺跡の遺構と遺物	10	VI 調査のまとめ	54
1. 住居跡	10	1. 調査の成果	54
2. 方形周溝墓	13	2. 代正寺遺跡の溝跡（環濠）について	54
3. 溝跡	14	3. 大西遺跡の刻書紡錘車について	55
4. 土壌	17		
5. ビット	19	写真図版	

挿 図 目 次

第1図 埼玉県の地形	3	第14図 第1号溝跡出土遺物	17
第2図 周辺の遺跡	5	第15図 第3号溝跡出土遺物	18
第3図 調査位置図	8	第16図 土壌・出土遺物	20
第4図 基本土層	8	大西遺跡	
第5図 代正寺・大西遺跡全体図	9	第17図 第1号住居跡・出土遺物	21
代正寺遺跡		第18図 第2号住居跡・出土遺物	22
第6図 第1号住居跡	10	第19図 第3号住居跡	23
第7図 第1号住居跡出土遺物	11	第20図 第4号住居跡	24
第8図 第2号住居跡	12	第21図 第4号住居跡出土遺物	25
第9図 第2号住居跡出土遺物	12	第22図 第5号住居跡・出土遺物	26
第10図 第3号住居跡・出土遺物	13	第23図 第6号住居跡（1）	27
第11図 第1号方形周溝墓	14	第24図 第6号住居跡（2）	28
第12図 第1号方形周溝墓出土遺物	15	第25図 第6号住居跡出土遺物	29
第13図 第1・2・3号溝跡	16	第26図 第7号住居跡（1）	32

第27図	第7号住居跡(2)	33	第37図	第1号方形周溝墓(2)	43
第28図	第7号住居跡(3)	34	第38図	第1号方形周溝墓出土遺物	44
第29図	第7号住居跡出土遺物(1)	35	第39図	第1号井戸跡・出土遺物	45
第30図	第7号住居跡出土遺物(2)	36	第40図	溝跡	47
第31図	第7号住居跡出土遺物(3)	37	第41図	溝跡出土遺物	48
第32図	第7号住居跡出土遺物(4)	38	第42図	土壌	50
第33図	第8号住居跡・出土遺物	40	第43図	土壌出土遺物	51
第34図	第8・9号住居跡出土遺物	40	第44図	グリッド出土遺物	52
第35図	第9号住居跡・出土遺物	41	第45図	代正寺遺跡宮ノ台式期の集落	55
第36図	第1号方形周溝墓(1)	42			

表 目 次

代正寺遺跡

第1表	第1号住居跡出土遺物観察表	11	第13表	第5号住居跡出土遺物観察表	26
第2表	第2号住居跡出土遺物観察表	12	第14表	第6号住居跡出土遺物観察表	30
第3表	第3号住居跡出土遺物観察表	13	第15表	第7号住居跡出土遺物観察表	38
第4表	第1号方形周溝墓出土遺物観察表	15	第16表	第8号住居跡出土遺物観察表	40
第5表	溝跡一覧表	15	第17表	第8・9号住居跡出土遺物観察表	40
第6表	第1号溝跡出土遺物観察表	17	第18表	第9号住居跡出土遺物観察表	41
第7表	土壌一覧表	17	第19表	第1号方形周溝墓出土遺物観察表	45
第8表	第3号溝跡出土遺物観察表	19	第20表	第1号井戸跡出土遺物観察表	46
第9表	第5号土壌出土遺物観察表	19	第21表	溝跡一覧表	46
			第22表	溝跡出土遺物観察表	48
			第23表	土壌一覧表	49
			第24表	土壌出土遺物観察表	51
			第25表	グリッド出土遺物観察表	53

大西遺跡

第10表	第1号住居跡出土遺物観察表	21
第11表	第2号住居跡出土遺物観察表	22
第12表	第4号住居跡出土遺物観察表	25

写 真 図 版 目 次

図版 1

- 1 代正寺遺跡・大西遺跡遠景(北から)
- 2 代正寺遺跡・大西遺跡空中写真(北から)

図版 2

- 1 代正寺遺跡Ⅱ—1区全景(西から)
- 2 代正寺遺跡Ⅱ—2区全景(西から)
- 3 代正寺遺跡Ⅲ区全景(東から)

- 4 代正寺遺跡第1号住居跡全景(北から)
- 5 代正寺遺跡第2号住居跡全景(東から)
- 6 代正寺遺跡第2号住居跡遺物出土状況(西から)(1)
- 7 代正寺遺跡第2号住居跡遺物出土状況(西から)(2)
- 8 代正寺遺跡第3号住居跡・第6号土壌全景

(西から)

図版 3

- 1 代正寺遺跡第3号住居跡雁股鐵出土状況
(西から)
- 2 代正寺遺跡第1号方形周溝墓全景 (南から)
- 3 代正寺遺跡第1号溝跡全景 (北から)
- 4 代正寺遺跡第2号溝跡全景 (南から)
- 5 代正寺遺跡第3号溝跡全景 (北から)
- 6 代正寺遺跡第3号溝跡遺物出土状況
(西から) (1)
- 7 代正寺遺跡第3号溝跡遺物出土状況
(西から) (2)
- 8 代正寺遺跡第1号土壇全景 (南から)

図版 4

- 1 代正寺遺跡第2号土壇全景 (北から)
- 2 代正寺遺跡第4号土壇全景 (西から)
- 3 代正寺遺跡基本土層
- 4 大西遺跡中央全景 (西から)
- 5 大西遺跡東側全景 (東から)
- 6 大西遺跡西半全景 (西から)
- 7 大西遺跡西半全景 (東から)
- 8 大西遺跡第1号住居跡全景 (北西から)

図版 5

- 1 大西遺跡第1号住居跡炉跡
- 2 大西遺跡第1号住居跡炉跡遺物出土状況
- 3 大西遺跡第2号住居跡全景 (南から)
- 4 大西遺跡第3号住居跡全景 (南西から)
- 5 大西遺跡第3号住居跡炉跡 (西から)
- 6 大西遺跡第4号住居跡全景 (西から)
- 7 大西遺跡第4号住居跡遺物出土状況
(西から) (1)
- 8 大西遺跡第4号住居跡遺物出土状況
(西から) (2)

図版 6

- 1 大西遺跡第4号住居跡遺物出土状況
(西から) (3)
- 2 大西遺跡第5号住居跡全景 (西から)

3 大西遺跡第5号住居跡カマド (西から)

4 大西遺跡第6号住居跡全景 (西から)

5 大西遺跡第6号住居跡掘り方 (西から)

6 大西遺跡第6号住居跡遺物出土状況
(西から)

7 大西遺跡第6号住居跡カマド (西から)

8 大西遺跡第6号住居跡墨書土器「伊」出土状況

図版 7

- 1 大西遺跡第6号住居跡鉸具出土状況
- 2 大西遺跡第7号住居跡全景 (北西から)
- 3 大西遺跡第7号住居跡カマド (北西から)
- 4 大西遺跡第7号住居跡遺物出土状況
(北西から) (1)
- 5 大西遺跡第7号住居跡遺物出土状況
(北西から) (2)
- 6 大西遺跡第7号住居跡遺物出土状況
(北西から) (3)
- 7 大西遺跡第8号住居跡炉跡 (南から)
- 8 大西遺跡第8号住居跡遺物出土状況
(北西から)

図版 8

- 1 大西遺跡第8・9号住居跡全景 (北西から)
- 2 大西遺跡第1号方形周溝墓全景 (南東から)
- 3 大西遺跡第1号方形周溝墓遺物出土状況
(北西から)
- 4 大西遺跡第1号方形周溝墓遺物出土状況
- 5 大西遺跡第1号溝跡全景 (東から)
- 6 大西遺跡第2号溝跡全景 (東から)
- 7 大西遺跡第3号溝跡全景 (北から)
- 8 大西遺跡第4号溝跡全景 (東から)

図版 9

- 1 大西遺跡第5号溝跡全景 (北から)
- 2 大西遺跡第6号溝跡全景 (北西から)
- 3 大西遺跡第7・8号溝跡全景 (南から)
- 4 大西遺跡第9号溝跡全景 (北東から)
- 5 大西遺跡第10号溝跡全景 (北から)
- 6 大西遺跡第4・11・12号溝跡全景 (北西から)

- 7 大西遺跡第1号土城全景(東から)
 - 8 大西遺跡第3号土城全景(北から)
- 図版10
- 1 大西遺跡第4号土城全景(東から)
 - 2 大西遺跡第6号土城全景(南西から)
 - 3 大西遺跡第7号土城全景(北西から)
 - 4 大西遺跡第7号土城墨書土器「十」出土状況(西から)
 - 5 大西遺跡第8号土城全景(北西から)
 - 6 大西遺跡第9号土城遺物出土状況(北から)
 - 7 大西遺跡第1号井戸跡全景(北東から)
 - 8 大西遺跡基本土層(南から)

図版11

- 1 代正寺遺跡第2号住居跡(第9図1)
- 2 代正寺遺跡第3号住居跡(第10図1)
- 3 代正寺遺跡第2号住居跡(第9図6)
- 4 代正寺遺跡第1号方形周溝墓(第12図5)
- 5 代正寺遺跡第3号溝跡(第15図2)
- 6 代正寺遺跡第3号溝跡(第15図3)
- 7 代正寺遺跡第3号溝跡(第15図4)
- 8 代正寺遺跡第3号溝跡(第15図5)
- 9 代正寺遺跡第3号溝跡(第15図6)
- 10 代正寺遺跡第3号溝跡(第15図12)
- 11 代正寺遺跡第3号溝跡(第15図13)

図版12

- 1 代正寺遺跡第3号溝跡(第15図17)
- 2 代正寺遺跡第3号溝跡(第15図19)
- 3 代正寺遺跡第3号溝跡(第15図20)
- 4 代正寺遺跡第1号溝跡(第14図)
- 5 代正寺遺跡第3号溝跡(第15図)
- 6 大西遺跡第4号住居跡(第21図1)
- 7 大西遺跡第4号住居跡(第21図3)
- 8 大西遺跡第4号住居跡(第21図4)
- 9 大西遺跡第6号住居跡(第25図1)

図版13

- 1 大西遺跡第6号住居跡(第25図2)
- 2 大西遺跡第6号住居跡(第25図3)

- 3 大西遺跡第6号住居跡(第25図5)
- 4 大西遺跡第6号住居跡(第25図16)
- 5 大西遺跡第6号住居跡(第25図22)
- 6 大西遺跡第7号住居跡(第29図1)
- 7 大西遺跡第7号住居跡(第29図17)
- 8 大西遺跡第7号住居跡(第29図25)
- 9 大西遺跡第7号住居跡(第30図33)
- 10 大西遺跡第7号住居跡(第31図39)

図版14

- 1 大西遺跡第7号住居跡(第31図40)
- 2 大西遺跡第7号住居跡(第32図52)
- 3 大西遺跡第8号住居跡(第33図1)
- 4 大西遺跡第8号住居跡(第33図2)
- 5 大西遺跡第8号住居跡(第33図3)
- 6 大西遺跡第8号住居跡(第33図4)
- 7 大西遺跡第9号住居跡(第35図3)
- 8 大西遺跡第1号方形周溝墓(第38図1)

図版15

- 1 大西遺跡第1号方形周溝墓(第38図2)
- 2 大西遺跡第1号方形周溝墓(第38図7)
- 3 大西遺跡第11号溝跡(第41図15)
- 4 大西遺跡第11号溝跡(第41図16)
- 5 大西遺跡第11号溝跡(第41図19)
- 6 大西遺跡第3号土城(第43図6)
- 7 大西遺跡第3号土城(第43図5)
- 8 大西遺跡第7号土城(第43図7)

図版16

- 1 大西遺跡第9号土城(第43図2)
- 2 大西遺跡第1号井戸跡(第39図4)
- 3 大西遺跡グリッド(第44図10)
- 4 大西遺跡第6号住居跡(第25図)
- 5 大西遺跡第7号住居跡(第29図)
- 6 大西遺跡第7号住居跡(第29・30図)
- 7 大西遺跡第7号住居跡(第29・31図)
- 8 大西遺跡グリッド石製品(第44図)
- 9 大西遺跡第6・7号住居跡鉄製品(第25・32図)

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では「安心・成長・自立自尊の埼玉へ」を平成24年からの5か年計画の針路とし、各分野での施策に取り組んでいる。

安心・安全を広げる分野では基本目標4として「暮らしの安心・安全を確保する」を掲げ、交通安全対策が推進されている。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、県が実施するこうした公共開発事業に係る埋蔵文化財の保護について、従前より関係部局と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

県道岩殿観音南戸守線バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財の所在及び取り扱いについては、平成22年2月25日付け東整第2066号で東松山県土整備事務所長から生涯学習文化財課長あて照会があった。

用地の取得状況から試掘による確認調査は2回に分けて行われた。その結果、埋蔵文化財の所在が明確になったため、平成22年5月18日付け教生文第330—1号と平成23年6月28日付け教生文第602—1号で次の内容の回答を行った。

1 埋蔵文化財の所在

工事予定地内には、次の埋蔵文化財包蔵地が所在します。

名称：代正寺遺跡 (No.34—51)
種別：集落跡
時代：古墳、奈良・平安時代
所在地：東松山市大字宮島地内

名称：大西遺跡 (No.34—54)
種別：集落跡
時代：縄文、弥生、古墳、奈良・平安時代
所在地：東松山市大字大黒部地内

2 手法続

工事予定地内には、上記の埋蔵文化財包蔵地が所在しますので、工事着手に先立ち、文化財保護法第94条の規程による発掘通知を提出してください。

3 取扱いについて

別図2の「発掘調査を要する区域」について、工事計画ややむを得ず現状を変更する場合には、記録保存のための発掘調査を実施してください。

同「工事に着手して差し支えない区域」については、工事中に新たに埋蔵文化財を発見した場合は、直ちに工事を中止して、取扱いについて埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課と協議してください。

東松山県土整備事務所（以下「東松山県土」と）と生涯学習文化財課は、埋蔵文化財の保存について協議を重ねたが、現状保存は困難との結論に達したため、記録保存の措置を講ずることとなり、そのための発掘調査は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（当時、以下「事業団」）が受託することになった。

文化財保護法第94条の規定による発掘通知は、東松山県土整備事務所から知事名で平成23年9月29日付け東整第955号で提出され、これに対する県教育委員会教育長からの勧告は平成23年10月13日付け教生文第4—789号で通知された。

文化財保護法第92条の規定による事業団からの発掘調査届に対する県教育委員会教育長からの指示通知は、以下のとおりである。

代正寺遺跡：平成23年10月5日付け教生文第2—53号

大西遺跡：平成23年10月5日付け教生文第2—46号

（埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課）

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

代正寺・大西遺跡の発掘調査は、社会資本整備総合交付金（改築）工事（一般県道岩殿観音南戸守線）に先立ち、平成23年10月3日から平成23年12月28日まで実施した。調査面積は3,221㎡である。

10月当初、重機による表土除去作業を開始し、並行して事務所の設置を行った。

表土除去後、遺構実測作業のための基準点測量及びグリッド杭敷設作業を実施した。その後、人力による遺構確認作業を行い、弥生時代から近世に至る竪穴住居跡・溝跡・土壇・井戸跡などを検出した。直ちに精査に着手し、順次、土層断面図・遺構平面図・遺物出土状況図などを作成のうえ写真撮影等の記録作業を行った。12月2日に航空機による空中写真の撮影を実施した。

遺構・遺物の調査を完了した後、埋戻しを実施し、引き続き遺物、器材の撤収、12月27日に発掘事務所の撤去を行い、すべての調査を終了した。

(2) 整理報告書作成

整理・報告書の作成事業は、平成25年1月4日から平成25年3月29日まで実施した。

作業は出土遺物の水洗・注記の後、直ちに接合復元を開始した。復元を終えた遺物は、順次、実測・トレース・採拓を経て、遺構ごとに印刷用の図版組を行った。2月中旬には、図版用の遺物写真を撮影した。同時に、発掘調査で記録した遺構の断面図や平面図などは、照合・修正を加えた第二原図を作成し、スキャナでコンピュータに取り込んだ。その後、画像編集ソフトを用いて遺構ごとにトレース、また土層説明などのデータを組み込み、印刷用の版下を作成した。2月下旬までに原稿執筆を終えて、報告書の編集を行い、印刷業者に入稿した。3回の校正を経て、平成25年3月25日に報告書を刊行した。

なお、図面や写真などの記録類や遺物は、3月末に仮整理・分類、収納した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成23年度（発掘調査）

理 事 長	藤 野 龍 宏	調 査 部	
常務理事兼総務部長	根 本 勝	調 査 部 長	小 野 美代子
総務部		調 査 部 副 部 長	劍 持 和 夫
総 務 部 副 部 長	金 子 直 行	主幹兼調査第二課長	瀧 瀬 芳 之
総 務 課 長	矢 島 将 和	主 査	岩 瀬 譲

平成24年度（報告書作成）

理 事 長	中 村 英 樹	調 査 部	
常務理事兼総務部長	根 本 勝	調 査 部 長	昼 間 孝 志
総務部		調 査 部 副 部 長	劍 持 和 夫
総 務 部 副 部 長	富 田 和 夫	主幹兼整理第二課長	赤 熊 浩 一
総 務 課 長	矢 島 将 和	主 査	福 田 聖

II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

代正寺遺跡は、東松山市大字正代から宮鼻にかけて、また大西遺跡は東松山市大字宮鼻から黒部にかけてそれぞれ所在する。東武東上線高坂駅から約1km南東の位置にあたる。現在は宅地と畑地が混在している。

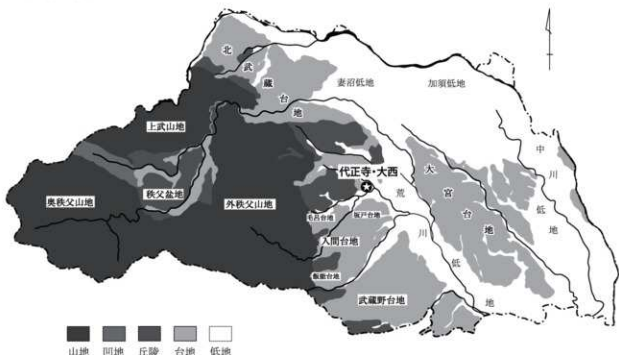
埼玉県は、おおまかに秩父山地を中心とする山地、それに連なる台地・丘陵からなる西部地域と、荒川低地を中心とする東部地域に二分される。両遺跡はその境界部に当たる高坂台地に立地する（第1図）。

埼玉県はこうした地形上の特性から、西部の山地・丘陵を源流とする河川が発達しており、県土の約3分の1を河川とその周辺の低地が占めている。県北部は利根川とその支流の流域、県中部、県南部は荒川とその支流の流域になり、その流路によって現在の地形は形成されている。流域面積は、国内で最大である。

両遺跡の北側には都幾川の広い氾濫原（押垂低地、早俣低地）を挟み、比企、岩殿の2つの丘陵がある。特に比企丘陵の東側は独立した残丘になっており、吉見丘陵と呼ばれている。

比企丘陵の間の市野川と都幾川に挟まれた台地は東松山台地、都幾川と越辺川に挟まれた小さな台地は高坂台地とそれぞれ呼ばれている。

両遺跡が立地する高坂台地は、岩殿丘陵の東部に繋がる小さな三角形の台地である。北側を流れる都幾川と、南側を流れる支流の九十九川に開析された洪積台地で、上面は平坦である。台地北縁は崖状もしくは急斜面で、沖積地との比高差は約8mである。一方、南縁は比較的緩やかな斜面が形成されている。また、南から入り込む開析谷が台地を分断している。開析谷の西側が、代正寺遺跡、東側が大西遺跡である。



第1図 埼玉県の地形

2. 歴史的環境

代正寺遺跡(1)・大西遺跡(2)が所在する高坂地域では、一般国道407号バイパス建設工事や区画整理事業等に先立って発掘調査が実施されている。これらの成果として、当事業団では『代正寺・大西』(第110集)・『西浦／野本氏館跡／山王裏／銭塚』(第340集)・『反町遺跡Ⅰ』(第361集)・『銭塚Ⅱ／城敷Ⅰ』(第369集)・『反町遺跡Ⅱ』(第380集)・『城敷遺跡Ⅱ』(第382集)・『反町遺跡Ⅲ』(第393集)を刊行している。東松山市周辺の歴史的環境については、それぞれの報告書において詳細に述べられていることから、本書では特に高坂地域を中心とした歴史的環境を概観する(第2図)。

代正寺遺跡は、縄文時代前期・弥生時代中期後半から中近世に亘る集落跡と、高坂古墳群をも内包する複合遺跡である。縄文時代前期の諸磯式期の住居跡1軒が検出され、南から入り込んだ開析谷に面して集落が営まれたと考えられる。また、縄文中期・後期の土器片も出土していることから、この時期の遺構が存在する可能性がある。

大西遺跡は、弥生時代後期後半から中近世に亘る集落跡である。また、古墳は検出されておらず、高坂古墳群に対応する集落跡であったと考えられる。

弥生時代中期では、高坂台地、東松山台地、吉見丘陵、坂戸台地に遺跡が展開する。高坂台地の北縁には、本遺跡以外に東形遺跡が所在する。詳細は不明だが竪穴住居跡数軒と環濠の可能性があり溝跡が検出されている。

高坂台地と都幾川に挟まれた沖積低地の早俣低地や押垂低地には、銭塚遺跡(14)(菊池2007、富田・山本2010、山本2011)・反町遺跡(16)(福田2009、赤熊2010、福田2012)がある。

反町遺跡からは中期後半から後期後半の竪穴住居跡37軒、方形周溝墓5基、土器棺墓2基等が発見され、本遺跡と合わせて、至近の台地上、低地

には、複数の中核的な集落が形成されている。

弥生時代後期になると、櫛描文が施された岩岸式土器を伴う遺跡が分布する。反町遺跡からは、竪穴住居跡28軒、方形周溝墓4基、土器棺墓2基が、銭塚遺跡からは岩岸式土器を使用した土器棺墓が検出されている。

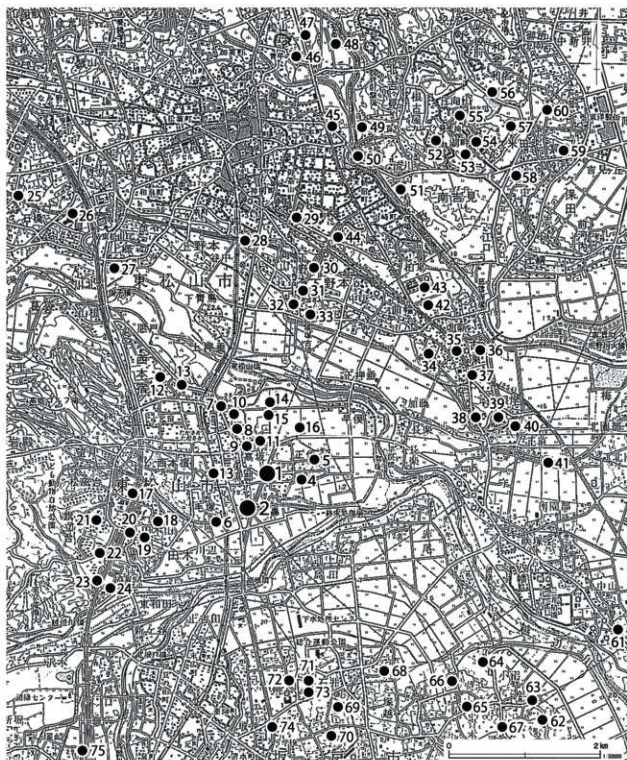
また、都幾川左岸の東松山台地南側の緩斜面には、西浦遺跡(32)・野本氏館跡(31)があり、都幾川左岸の雄子山遺跡(26)からは住居跡が検出されている。附川遺跡(27)でも、櫛描文土器が出土しているが、大部分は中期後半と考えられる。

坂戸台地には、台地の北縁にあたる小台地上に形成された新町遺跡(71)を取り囲むように、終遺跡(69)(加藤2001)、石井前原遺跡(70)(加藤・堀北・柳葉1988)、勇福寺遺跡(72)、相撲場遺跡(74)(谷井1973)等の集落や周溝墓群が存在する。

一方、後期後半の吉ヶ谷式土器を出土する遺跡には、八幡遺跡(48)、根平遺跡(21)(水村・井上ほか1980)、駒堀遺跡(24)(谷井・今泉・野部1974)、杉の木遺跡(6)(小峰1963、宮島・江原2003、大谷・宅間2006)、下寺前遺跡(3)、大西遺跡、高坂式番町遺跡(8)、高坂三番町遺跡(9)があげられる。反町遺跡ではこの時期の遺構が検出されず、集落は途絶すると考えられる。

未報告のため詳細は不明だが、高坂式番町・高坂三番町遺跡(柿沼・佐藤・宮島2008)からは、数十軒の住居跡や環濠の可能性が高い溝跡が検出されている。

古墳時代前期になると、東松山台地北部の五領式土器の標式遺跡である五領遺跡(29)から、100軒ほどの住居跡が検出されている。また、番清水遺跡(43)・天神原遺跡(38)・下寺前遺跡(3)、高坂台地の代正寺・大西遺跡、高坂式番町遺跡でも住居跡が検出されている。



- 1 代正寺遺跡 2 大西遺跡 3 下寺前遺跡 4 小代氏館跡 5 東形遺跡 6 杉の木遺跡 7 高坂一帯町遺跡 8 高坂式通町遺跡 9 高坂三番町遺跡 10 高坂氏館跡
 11 高坂8・9号墳 12 舞鶴山古墳群 13 舞鶴山29号墳 14 銭塚遺跡 15 城敷遺跡 16 坂町遺跡 17 舞台遺跡 18 船山館跡群 19 田木山遺跡 20 大塚原遺跡
 21 根平遺跡 22 輪山遺跡 23 立野遺跡 24 駒形遺跡 25 岩の上遺跡 26 椎子山遺跡 27 附川遺跡 28 電田遺跡 29 五坂遺跡 30 山王裏遺跡 31 野本氏館跡
 32 西浦遺跡 33 野本将軍塚古墳 34 古古海遺跡 35 下道原遺跡 36 下山遺跡 37 古瀬御平塚遺跡 38 天神原遺跡 39 相平稲荷神社古墳 40 正直稲荷塚古墳
 41 正直玉作遺跡 42 おくま山古墳 43 香清水遺跡 44 柏崎古墳群 45 観音寺遺跡 46 岩島遺跡 47 中原遺跡 48 八幡遺跡 49 吉見百穴横穴墓群 50 松山城跡
 51 吉見桑里遺跡 52 大行山遺跡 53 久米田古墳群 54 久米田遺跡 55 かぶと塚古墳 56 和名埴輪窯跡群 57 山の根古墳 58 三ノ軒地遺跡 59 原遺跡 60 下遺跡
 61 堂地遺跡 62 木曾面遺跡 63 小沼集ノ内遺跡 64 附島遺跡 65 貫電塚古墳 66 塚越渡戸遺跡 67 北谷遺跡 68 勝呂遺跡 69 純遺跡 70 石井前原遺跡
 71 新町遺跡 72 勇福寺遺跡 73 舞山古墳 74 相模坂遺跡 75 下田遺跡

第2図 周辺の遺跡

高坂台地北側の沖積低地にも、大規模な集落が形成されている。反町遺跡は古墳時代前期から中期にかけての大集落で、治水灌漑用の堰跡・水晶の玉作工房跡・ガラス玉の鋳型等の貴重な資料が発見された。しかし、古墳時代中期になると集落は衰退し、やがて古墳が築造され始めて墓域へと変容していった。同一の遺跡群と捉えられる城敷遺跡(15)は、古墳時代前期と中期後半から後期初頭の集落跡である。掘立柱建物跡や滑石工房跡などが発見され、初期須恵器や多量の木製品が出土している。

高坂台地の縁辺には、これを取り巻くように、諏訪山古墳群・高坂古墳群・毛塚古墳群が造営されている。今回の調査では古墳や古墳時代中期・後期の遺物が出土していないため、前二者について述べる。

都幾川を望む台地北縁に位置する諏訪山古墳群は、前期から後期まで継続された古墳群で、諏訪山29号墳(前方後方墳)・諏訪山古墳(前方後円墳)・諏訪山33号墳(円墳)と首長墓の系譜が辿れる。台地中央部から東部にかけて営まれた高坂古墳群は、現在50基が確認されている。代正寺遺跡の古墳跡も、高坂古墳群に含まれる。前方後円墳の高済寺古墳は、高坂氏館跡(10)の土塁として二次的利用されたため不明な点が多いが、6世紀前半代に築造された可能性が指摘されている。

また、大型円墳の高坂神社古墳(高坂9号墳)(11)の北側、高坂8号墳の周辺からは三角縁二神二獣鏡が出土している。高坂8号墳の埋葬施設からは振文鏡、水晶製勾玉、緑色凝灰岩製の管

玉、鉾が出土し、諏訪山古墳群同様に4世紀からの首長系列が追える可能性が高い。

反町遺跡では5世紀後半の前方後円墳から築造が開始され、6世紀初頭前後の円墳26基以上からなる初期群集墳が形成されている。

奈良・平安時代の遺跡では、未報告ながら大西遺跡や銭塚遺跡で大規模な集落跡が検出されており、遺跡周辺が古代における中核的な地域であったことが窺える。同じ高坂台地上の下寺前遺跡からは、「堂」的な建物跡と勝呂庵寺系の瓦が出土しており、寺院と集落の関係が注目される。

岩殿丘陵から派生する支丘上には、7世紀後半から8世紀初頭の大塚原遺跡(20)、緑山遺跡(22)などがあり、立野遺跡(23)からは埴・円面硯・須恵質陶棺形土製品が出土している。

都幾川対岸の比企丘陵東端には沢口遺跡、松山台地には山王裏遺跡、上川入遺跡、中原遺跡、西浦遺跡、番清水遺跡、下山遺跡(36)、岩の上遺跡(25)、岩鼻遺跡(46)がある。比企郡家の遺称地「古凍」の西側の山王裏、上川入、中原、西浦の各遺跡は至近距離にあり、これまでに、奈良・平安時代の住居跡92軒が調査されている。山王裏遺跡からは、基壇と勝呂庵寺系の瓦が出土している。

また、越辺川対岸の坂戸台地には、若葉台遺跡、山田遺跡、脚折遺跡群が所在する。毛呂台地上にある稲荷前遺跡は古墳時代から平安時代の地域の中心的な集落で、集落内寺院の存在が推定されている。

Ⅲ 遺跡の概要

代正寺遺跡と大西遺跡は、高坂台地の東側に立地し、開析谷を挟んで対峙している（第3図）。大西遺跡にはB・C-12～14グリッドにも埋没谷が入り、現在よりも起伏のある地形であったと考えられる。

確認面の標高は、代正寺遺跡が25.7～27.2m、大西遺跡が25.5～27.5mで、双方とも遺跡の境となる解析谷に向け傾斜している。

現地表面から確認面としたローム土上面までは20～30cmと浅く、土壌堆積はあまり発達していない。谷部近辺には厚さ10～20cmの弥生時代の包含層が認められた。深度が浅く、攪乱も著しいため残存していなかったが、本来は台地の平坦面にも同様の包含層が広がっていたと考えられる。

調査では便宜上、代正寺遺跡をⅡ-1・2区、Ⅲ区、大西遺跡をⅠ区と呼称した。

代正寺遺跡第8次調査では、弥生時代中期後半の住居跡2軒、方形周溝墓1基、溝跡2条、土壌1基、古墳時代前期の住居跡1軒、中世の土壌1基、近世の溝跡1条、土壌5基が検出された。

調査区が道路幅のため部分的な検出に留まる遺構が多く、詳細は不明な点が多いが、大西遺跡を隔てる谷に面したⅡ-2区西側ではほとんど遺構が検出されないことから、同区が遺構の分布の西限と考えられる。当事業団による国道407号バイパスの調査では、宮ノ台式期の住居跡1軒、方形周溝墓6基が検出されており、今回の調査を含めると相当大規模な集落である可能性が考えられる。また、同時期の第3号溝跡は、削平を受けているにも関わらず遺物が多く出土することから、集落を囲む環濠の可能性もある。

また、遺跡内には古墳時代前期から後期に亘る高坂古墳群が分布しているが、今回の調査では関連する遺構、遺物はともに検出されなかった。

大西遺跡は高坂台地の南半部、東側と西側を開

析谷によって画された舌状の小支台上に立地する。

大西遺跡第13次調査では、弥生時代後期後半の住居跡1軒、古墳時代前期の住居跡4軒、方形周溝墓1基、溝跡2条、土壌2基、平安時代の住居跡3軒、土壌5基、中世の井戸跡1基、近世の溝跡10条、土壌1基が検出された。

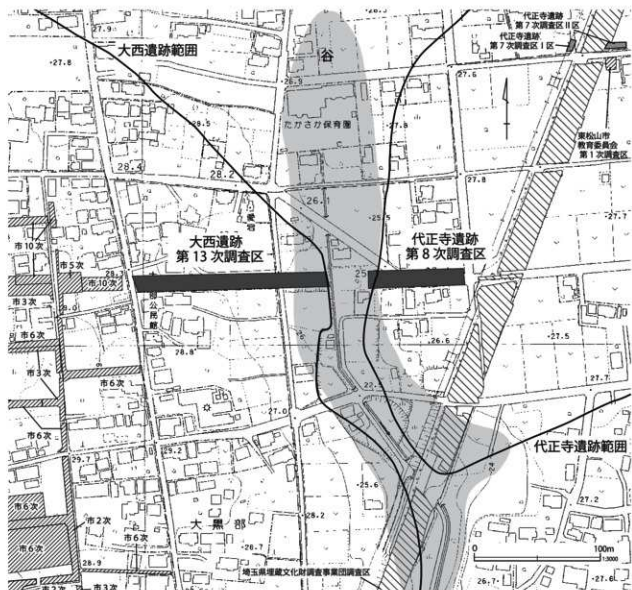
古墳時代前期の住居跡は、一辺4m前後の方形である。第4号住居跡では、貯蔵穴に周堤帯が巡らされていた。第8・9号住居跡は第1号方形周溝墓より古いことから、居住域から墓域への変遷が窺える。

大西遺跡では、当事業団による国道407号バイパスの調査で弥生時代後期後半から古墳時代後期の住居跡59軒が、市教育委員会の第2次調査で銅鐻と大型甕を出土した方形周溝墓がそれぞれ検出されており、遺跡が広範囲に及ぶとともに、複数の墓域が存在したこともうかがえる。

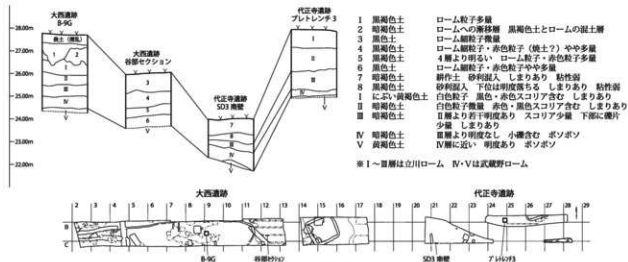
平安時代の第5～7号住居跡は、9世紀後半から10世紀にかけてのものである。第6・7号住居跡はカマドの造り替えが行われており、継続的な居住が窺える。いずれの住居跡からも、灰釉陶器が出土している。特に第7号住居跡からは、緑釉陶器輪花埴、埴、灰釉陶器埴、段皿、皿、長頸瓶、鉸具、「大田」の刻書の石製紡錘車、土師器、須恵器が出土している。

市教育委員会の調査では、未報告のため詳細は不明だが、多くの住居跡とともに寺院の基壇跡が検出された。勝呂庵寺系の瓦が出土していることから、奈良時代前期の寺院跡と推定される。また、本遺跡と同時期の住居跡からは風字硯が出土するなど、地域の中心的な集落であったと考えられる。

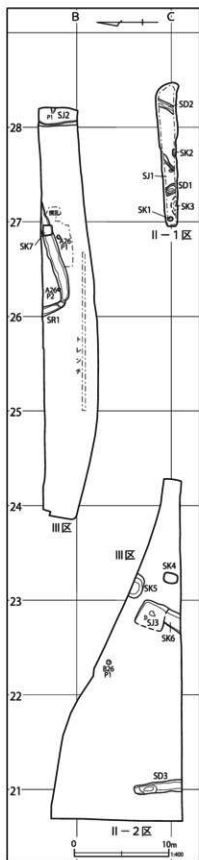
中近世の遺構は調査区の西側を中心に検出された。第3号溝跡から西側は屋敷に関係した遺構、等高線に沿った第4号溝跡は何らかの区画溝と考えられる。



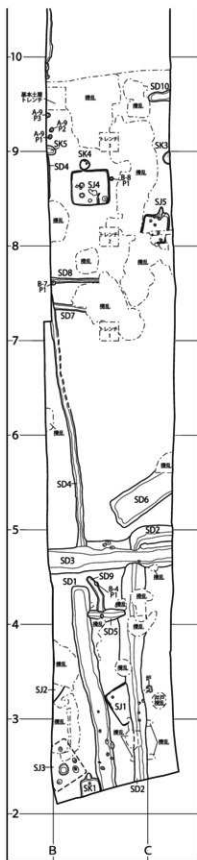
第3図 調査位置図



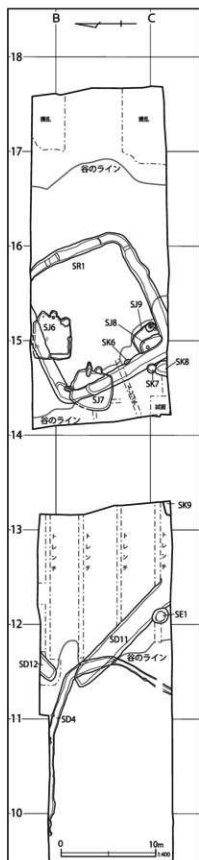
第4図 基本土層



代正寺遺跡第8次全体図



大西遺跡第13次全体図



第5図 代正寺・大西遺跡全体図

IV 代正寺遺跡の遺構と遺物

1. 住居跡

今回の調査では、弥生時代中期後半の住居跡2軒、古墳時代前期の住居跡1軒が検出された。弥生時代の住居跡は台地の平坦面に、古墳時代の住居跡は斜面に面して分布している。

第1号住居跡 (第6・7図)

弥生時代中期後半の住居跡である。II-1区の西側、B・C-27グリッドに位置する。遺構の大半が調査区域外にかかり、東壁の一部が検出できたのみである。遺構の西側は不明瞭だが、法面に立ち上がりが見られるため、調査区西縁まで遺構が続いていると考えられる。本遺構埋没後、第1号溝跡、第1・3号土壌が掘り込まれている。

東壁の軸方向はN-43°-Eである。検出できた規模は、東壁2.00m分、東西方向は7.00mである。確認面からの深さは0.20mである。覆土は、暗褐色土を主体とする自然堆積である。床面はほぼ平坦である。

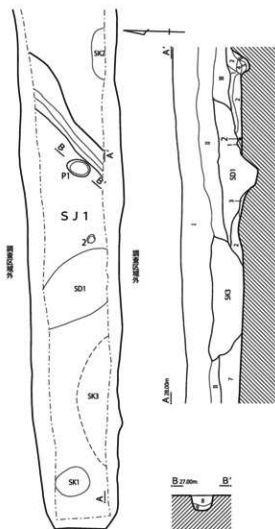
床面の東壁際からは、柱穴1本と壁周溝が検出された。柱穴は楕円形を呈し、長軸0.35m、短軸0.25m、床面からの深さは0.25mである。覆土は黒褐色土で自然堆積である。壁周溝は幅0.25m、深さ0.15mで、自然堆積と考えられる。

遺物は少なく、覆土中から弥生時代中期の壺、甕の破片が数点出土したに過ぎない。

第7図1は単口縁の大型の壺である。口縁部は内面に若干折り返されている。口縁端部は面を持ち、単節LRの縄文が施されている。4は壺の口縁端部で、内面が粘土の貼付によってやや肥厚する。口唇部から内面にかけて単節RLの縄文が施されている。5は壺の胴部で、単節RLの縄文が施され、沈線により区画されている。

第2号住居跡 (第8・9図)

弥生時代中期後半の住居跡である。III区の東側、A・B-28グリッドに位置する。遺構の南北



表土	耕作土
I 暗褐色土	ロームブロック微量 しまりやあり 粘性弱
II 黒褐色土	ロームを全体に混入 しまりあり 粘性ややあり
III 暗褐色土	ローム粒子・ロームブロックを均等に含む しまりやあり 粘性弱
S J 1	
1 暗褐色土	ローム粒子・ロームブロックを均等に含む しまり 粘性弱
2 暗褐色土	ローム粒子微量 しまりあり 粘性弱
3 灰黄褐色土	ロームを全体に混入 しまりあり 粘性ややあり
4 黒褐色土	ローム粒子微量 しまりあり 粘性弱
5 暗褐色土	ローム粒子・ロームブロック少量 しまり 粘性弱
6 暗褐色土	ロームブロック多量 しまり弱 粘性あり
7 暗褐色土	ローム粒子まばらに少量含む
ビット1	
8 黒褐色土	ローム粒子微量 しまり 粘性弱
9 黒褐色土	ロームブロック混入 しまり 粘性弱

0 2m

第6図 第1号住居跡



第7図 第1号住居跡出土遺物

第1表 第1号住居跡出土遺物観察表 (第7図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	弥生	壺	(18.8)	8.6	—	A E H I J K	5	良好	にぶい橙	C-27G 内外面赤彩	
2	弥生	壺	—	6.0	6.7	A C E H I J	70	良好	橙	No. 1	
3	弥生	壺	—	2.3	(6.8)	A E H I K	15	良好	明赤褐		
4	弥生	壺	—	1.1	—	A I J K	5	普通	赤褐	内面煤付着	
5	弥生	壺	—	2.1	—	A E I J K	5	良好	赤褐		

と東側は調査区域外にかかる。遺構の大半は調査区域外となるため、検出できたのは西壁の一部のみである。

西壁の軸方向はN-3°-Wである。検出できた範囲の規模は、南北方向4.10m、東西方向2.00mである。確認面からの深さは0.15~0.20mである。覆土は、黒褐色土を主体にロームブロックを多く含む。埋め戻された可能性がある。床面はほぼ平坦である。

床面からは柱穴1本と壁周溝が検出された。柱穴は楕円形で、規模は検出できた範囲で長軸0.60m、短軸0.50m、深さ0.25mである。深度があり、位置からも主柱穴の可能性が考えられる。壁周溝は幅0.30~0.50m、深さ0.05~0.10mで、埋め戻されている。

遺物は少なく、床面付近と覆土上層から、弥生時代中期の壺、甕の破片が出土したのみである。

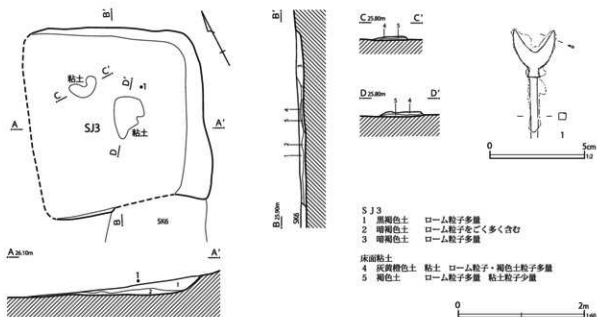
第9図1は受口状口縁の壺である。口縁端部と内側に粘土を貼付し受口状を呈する。2は単口縁の壺である。端面には先端の丸い工具により押捺が施されている。内面に炭化物が多く付着している。3・6は壺の底部である。内面は3は剥離し、6はヘラ磨きが施されている。6は底面もヘラ磨きである。4・5は甕である。4は正面やや

左側から、断面が丸い木口状工具による押捺が施されている。5は底部で、傷みが著しい。底面に木葉痕が認められる。外面赤変。7・8は壺、9~11は甕である。7は端部に粘土を付加することにより、薄い複合口縁を作出している。端面と複合部外面に単筋LRの縄文が施されている。複合部外面には断面が丸い工具により山形文が描かれている。外面肩部には簾状文が施され、その上位に竹管状工具による刺突が施されている。8は胴部で、単筋LRの縄文施文後沈線区画され、ヘラ磨きを加えられている。外面施文部以外赤彩。9は交互押捺の口縁部である。頸部には簾状文が施されている。11は直線的に短く開く口縁部で、端面に正面から木口状工具による押捺が、頸部には波状文が施されている。内面はヘラ磨きが施されている。10は胴部で、刷毛目後中部高地系のコの字重ね文が施されている。

第3号住居跡 (第10図)

古墳時代前期の住居跡である。II-2区の中央、B-22グリッドに位置する。遺構の西側は削平されており、様相は不明である。本住居跡埋没後、第6号土壌が掘りこまれている。

長軸の軸方向はN-27°-Eである。規模は、長軸3.00m、短軸方向は残存している範囲で2.80m



第10図 第3号住居跡・出土遺物

第3表 第3号住居跡出土遺物観察表 (第10図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	鉄製品	雁股鎌	全長5.3cm	幅0.5mm	厚さ0.35cm	鎌身長2.5cm	鎌身幅2.2cm	重さ5.5g	No.1	古代	11-2

である。確認面からの深さは0.15～0.20mである。覆土は黒褐色土と暗褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。床面はほぼ平坦である。炉跡や柱穴などの施設は検出されなかった。床面の中央2箇所から灰黄色の粘土塊が出土している。

遺物は小破片のため図示できなかったが、覆土中から古墳時代前期と考えられる壺、甕が少量出

土している。また、確認面付近からは雁股鎌が出土している。

第10図1は雁股鎌である。茎部を欠損している。刃部の割り込みは小さい。茎部と鎌身は台形の方角間で区画される。

本住居跡は古墳時代前期の遺構であり、雁股鎌は混入と考えられる。

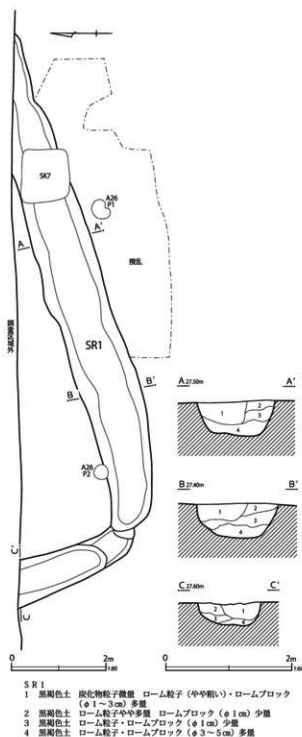
2. 方形周溝墓

今回の調査では、弥生時代中期後半の方形周溝墓が1基検出された。代正寺遺跡の407号パイパス調査区の南側の方形周溝墓群に連続し、地形からみて分布の西限に当たると考えられる。

第1号方形周溝墓 (第11・12図)

Ⅲ区のほぼ中央、A—26・27グリッドに位置する。遺構の北側の大部分が調査区域外にかかり、検出できたのは南溝と西溝の一部に留まる。本周溝墓埋没後、第7号土壌が掘りこまれている。東側約8mには同時期の第2号住居跡がある。

方台部は削平されており、盛土等は認められなかった。各周溝は直線的で、コーナーで幅を減じることから、全体の平面形は隅丸方形と考えられる。方台部側がやや直線的で、方形に近い。調査区内の長軸方位はN—71°—Eである。南西コーナーは両周溝とも浅くなっており、陸橋部状を呈している。各周溝の調査区内における規模は、南溝が長さ10.80m、幅0.85～1.25m、確認面からの深さ0.55mで、西側は細く、浅くなっている。西溝は長さ2.80m、幅0.70～0.90m、深さ0.35mで、



第11図 第1号方形周溝墓

南側は段を持って、細く、浅くなっている。底面のレベルを比較すると、南溝が低い。覆土は2～4層が自然堆積、第1層が埋め戻しの可能性がある。第1層が溝状であることから、所謂溝中溝の可能性が考えられる。

遺物は少なく、覆土中から弥生時代中期の壺、甕、高坏が出土している。また、平安時代の須恵器坏、江戸時代の染付碗が混入している。

第12図1は複合口縁の壺である。端部の外側に粘土帯を貼付して複合部を作出している。2は長頸壺である。3は甕の口縁部で、端部が肥厚する。端部には、左側から刻み目が施されている。5は混入の須恵器坏である。底部は回転糸切りである。鳩山Ⅷ期である。6～9は壺である。6は単節LRの縄文施文後、太い断面の丸い工具により横位の沈線を引いている。7は網目状燃糸文が施され、3段の結節によって区画されている。8はLR、RLの羽状縄文が施されている。外面は黒色を呈する。9は、中部高地系の4条1単位の斜格子文が施されている。10・11は甕である。10は、口縁端部に木目の粗い先端の丸い工具により押捺が施されている。内外面刷毛目後横ナデが加えられている。11は、上位に5条1単位の波状文が施されている。内外面黒褐色を呈する。

3. 溝跡

今回の調査では、弥生時代中期後半の溝跡が2条、中近世の溝跡が1条検出された。

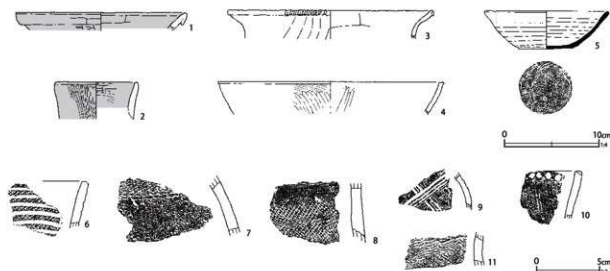
溝跡の概要は第5表のとおりである（第13図）。

第3号溝跡はⅡ-2区の西端、本遺跡と大西遺跡を隔てる谷の斜面部分に当たるB・C-20・21グリッドに位置する。削平を受けているが、弥生時代中期後半の土器が多く出土している。遺構の北側は削平が著しく、本来は更に北側に延びていたと考えられる。後述するように、本遺構は環濠の可能性がある。

遺物は第1・3号溝跡から、弥生時代中期後半の壺、甕、台付甕、高坏が出土している。

第1号溝跡出土遺物（第14図）

1は壺の底部である。底面はヘラケズリで外周のみナデが加えられている。2・3は、端部に交互押捺が施されている。4の外面は口縁下段が沈



第12図 第1号方形周溝墓出土遺物

第4表 第1号方形周溝墓出土遺物観察表 (第12図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	弥生	壺	(18.0)	1.9	—	ACEHI	5	普通	にぶい黄褐色	内外面赤彩	11~4
2	弥生	長頸壺	(8.4)	3.9	—	AEHIK	5	普通	赤褐色	内外面赤彩	
3	弥生	甕	(24.0)	—	—	AEHIJK	5	普通	灰黄褐色	外面煤	
4	土師器	高坏	(24.0)	3.4	—	AEHIK	5	普通	にぶい黄褐色	外面煤	
5	須恵器	坏	13.2	4.0	5.5	AEJK	100	普通	灰白	内外面赤彩	
6	弥生	壺	—	3.6	—	AEHIK	5	普通	黄褐色	外面赤彩	
7	土師器	壺	—	4.8	—	AEHI	5	普通	にぶい黄褐色	外面赤彩 内面黒色	
8	弥生	壺	—	4.7	—	AEHIJK	5	普通	褐色	外面黒色	
9	弥生	壺	—	2.8	—	AEHIK	5	普通	橙	外面黒色	
10	弥生	甕	—	3.9	—	AEIK	5	普通	灰褐色	内外面煤	
11	弥生	甕	—	2.4	—	AEHIJ	5	普通	暗灰黄	内外面黒褐色	

第5表 溝跡一覧表 (第13図)

単位:m

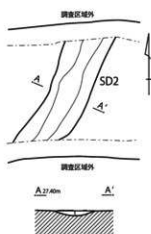
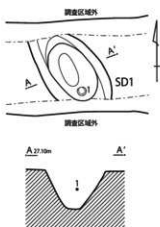
遺構名	時期	グリッド	重複	軸方位	長さ	幅	深さ	断面形	遺物	備考
1号溝	弥生中期後半	C・D-27	SJ1より新	N-20°-W	1.15	0.65~0.90	0.40	逆台形	弥生土器	
2号溝	近世	C・D-28		N-26°-E	1.85	0.60~0.70	0.05~0.20	皿形	なし	
3号溝	弥生中期後半	C・D-20・21		N-8°-E	5.00	1.00~1.30	0.30	逆台形	弥生土器	先端に土壌状の落ち込み: 長径1.80m 短径0.80m 深さ0.15m

線で区画され、単節LRの縄文が施されている。内面は口縁端部直下が凹線状になっている。

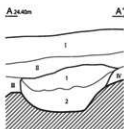
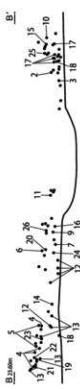
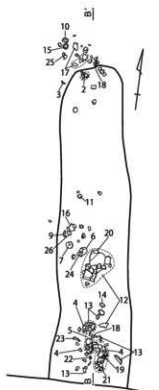
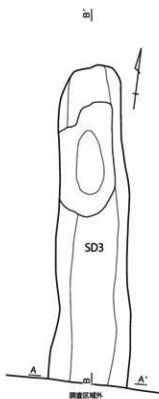
第3号溝跡出土遺物 (第15図)

2・3は受口状口縁で、頸部には右側からの刺突が施された突帯が貼付される。3は折り返し部の外面に単節LRの縄文が施文されている。棒状浮文が貼付されているが確認できたのは、1単位

のみで、他は剥離している。4の胴部内面はヘラナデ後に太い工具によるヘラナデが施されている。胴部最大径19.4cmを測る。5は肩部に3条の櫛描波状文が施され、上下を2条1単位の沈線により区画されている。胴部最大径17.5cmを測る。6は全面へら磨き後、2条1単位の沈線による結紐文が施され、単節LRの縄文が充填されている。



SD2層土
1 黒褐色土 ローム粒子・ブロック少量
しまりあり 粘性弱



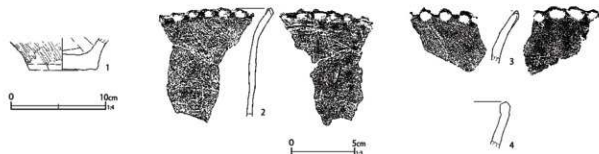
I 暗褐色土 腐作土 砂利混入 しまりあり 粘性弱
II 黒褐色土 砂利混入 下位は明度落ちる しまりあり 粘性弱
III 黒褐色土 砂利少量混入
IV 褐色土 ローム層 砂利混入 しまりあり 粘性ややあり

SD3

1 暗褐色土 砂利(地山)混入 焼土・炭化物粒子微量 しまりあり 粘性弱
2 黒褐色土 砂利(地山)混入 下位ほど混入多 炭化物粒子微量 しまりあり 粘性弱

0 2m
1:60

第13図 第1・2・3号溝跡



第14図 第1号溝跡出土遺物

第6表 第1号溝跡出土遺物観察表 (第14図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	弥生	壺	—	3.4	7.4	A E H I J K	90	良好	にぶい黄緑	No. 1	
2	弥生	甕	—	8.5	—	A E I J K	5	普通	にぶい褐	外面煤	12-4
3	弥生	甕	—	4.2	—	A E I J K	5	良好	にぶい褐	外面やや煤	12-4
4	弥生	甕	—	3.6	—	A E H I J K	5	良好	明赤褐		12-4

7は風化が進み、調整は不明瞭である。底面ヘラナデ。8・9の底面は8がヘラナデ、9はヘラケズリである。10の内面は剥離している。底部外周、底面はヘラナデである。12・13は交互押捺が施されている。13は端部が肥厚している。14は小型の底部で、外面、底面はヘラケズリが施されている。17は内面に粘土の単位が開裂として認められる。16・19・20は台付甕の脚台部である。19はホソ接合、16・20は鉢状の脚台部に胴部が接合されている。

21は単口縁の口縁部である。外面は刷毛目後ナ

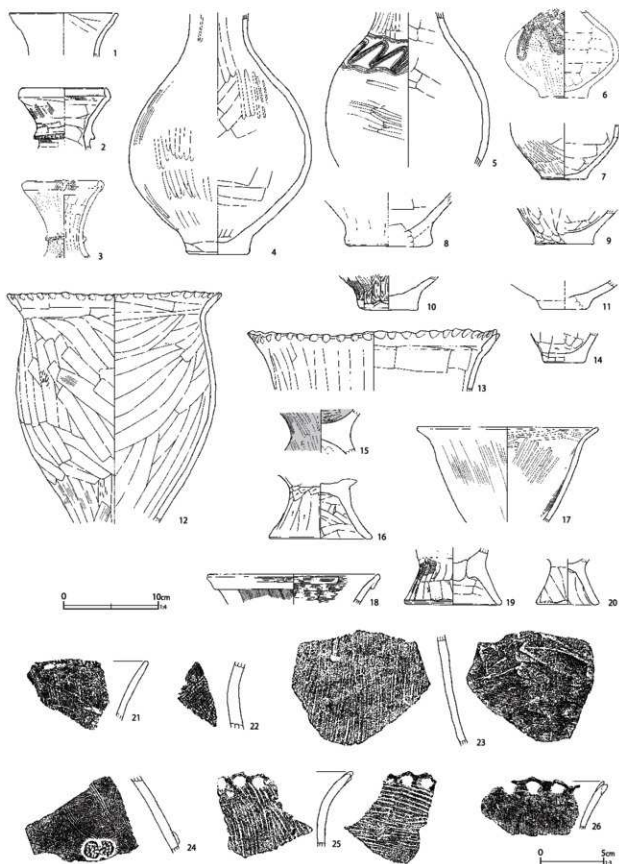
デ、内面はヘラナデが施されている。22は頸部の破片で、単節LR、単節RLの羽状の縄文が施されている。23は大型壺の肩部で、条痕状の板ナデが内外面に施されている。24は3条1単位の沈線によって大きな山形文が描かれ、植物の回転痕による擬縄文によって充填されている。山形文の頂部には竹管状工具によって刺突が施されたボタン状の円形浮文が貼付されている。25・26は甕の口縁部である。交互押捺である。25は内外面に太い刷毛目が施されている。

4. 土壌

第7表 土壌一覧表 (第16図)

単位: m

遺構名	時期	グリッド	重複	軸方位	長さ	幅	深さ	断面形	平面形	遺物	備考
1号土壌	弥生中期	B-27	SJ1より新	N-2°-W	0.55	0.50	0.25	逆台形	楕円形	弥生土器	
2号土壌	中近世以降	C-27		N-88°-E	0.80	0.20	0.15	箱形	隅丸方形	なし	
3号土壌	中近世以降	B・C-27	SJ1より新	不明	2.05		0.50	逆台形	(不明)	なし	土層断面で確認
4号土壌	中近世以降	B・C-23		N-50°-W	1.50	1.10	0.10	皿形	隅丸方形	なし	
5号土壌	中世	B-23		N-67°-W	2.55	1.20	0.25	皿形	不整形	在地産片口鉢かわらけ	
6号土壌	中近世以降	B・C-22		N-24°-E	1.95	1.70	0.10	皿形	不整形	土師器甕	
7号土壌	中近世以降	A-26		N-90°-W	1.10	1.00	0.30	箱形	方形	なし	



第15图 第3号清跡出土遺物

第8表 第3号溝跡出土遺物観察表 (第15図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	弥生	壺	(11.7)	4.6	—	A E H I J K	25	普通	明赤褐	C-21G	12-5
2	弥生	壺	(8.8)	6.6	—	A E H I K	40	普通	にぶい橙	No.38	11-5
3	弥生	壺	(7.7)	8.3	—	C E H I K	90	良好	明赤褐	No.39	11-6
4	弥生	壺	—	25.5	6.0	A E H I J K	70	普通	にぶい黄橙	No.1・3・12・16・C-21G	11-7
5	弥生	壺	—	11.5	—	A E H I J K	50	普通	にぶい黄橙	No.15・21	11-8
6	弥生	壺	—	9.2	5.2	A C E G I J	80	普通	にぶい褐	No.40	11-9
7	弥生	壺	—	5.9	4.9	A C E H I K	80	普通	橙	No.61	
8	弥生	壺	—	5.7	(9.0)	A E G H I K	30	普通	橙	C-21G	
9	弥生	壺	—	3.7	6.3	A E H I K	90	良好	橙	No.47	
10	弥生	壺	—	3.6	6.2	A C E H I K	90	普通	にぶい黄褐	No.22	
11	弥生	壺	—	3.0	(4.8)	E H I K	20	普通	橙	No.64	
12	弥生	甕	22.5	24.2	—	A E H I J K	95	良好	にぶい黄褐	No.57・58・59 上位煤付着	11-10
13	弥生	壺	27.0	6.6	—	A E H I J K	55	普通	明赤褐	No.4・5・19・53・55・C-21G	11-11
14	弥生	壺	—	3.1	4.6	A E I K	50	普通	褐	No.80 外面煤	
15	弥生	高坏	—	4.7	—	A E H I K M	85	普通	橙	No.23 内外面赤彩	
16	弥生	台付甕	—	6.5	11.0	A E H I K	95	良好	にぶい赤褐	No.63 胴部内外面煤付着	
17	弥生	鉢	(19.0)	10.0	—	A E H I J	40	普通	にぶい橙	No.31・32・35・36 内外面煤	12-1
18	土師器	広口壺	(18.0)	3.2	—	A C E H I J K M	5	良好	橙	No.52・73	12-5
19	土師器	台付甕	—	6.0	(10.4)	A E H I J K M	60	普通	にぶい黄橙	No.2・C-21G	12-2
20	土師器	台付甕	—	4.8	(6.4)	A E H I K	60	普通	明赤褐	No.41 外面二次加熱による赤化	12-3
21	弥生	壺	—	4.7	—	E H I K	5	普通	明赤褐	No.3	
22	弥生	壺	—	5.0	—	C H I K	5	普通	明褐	No.9	
23	弥生	壺	—	8.8	—	A C E H I J K	5	良好	にぶい橙	No.14	12-5
24	弥生	壺	—	6.0	—	A C E H I J K	5	普通	にぶい赤褐	No.60	12-5
25	弥生	甕	—	6.1	—	A E H I J K M	5	普通	暗褐	No.25 外面煤	12-5
26	弥生	甕	—	3.9	—	A E H I J K	5	普通	にぶい橙	No.46	12-5

土壌は7基検出された。遺物が出土したのは、第1・5・6号土壌のみである。第1号土壌は弥生時代中期、第5号土壌は中世、それ以外は時期不明だが、覆土の様相から中近世以降と考えられる。

土壌の概要は第7表のとおりである (第16図)。

第3号土壌は、第1号住居跡調査時に調査区壁面で確認され、掘り込みは認められなかった。断面上での長さは2.05m、深さは0.50mである。

第9表 第5号土壌出土遺物観察表 (第16図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	片口鉢	(26.8)	11.8	(13.3)	A E I K	25	普通	にぶい黄	No.2・3 在地産	
2	かわらけ	坏	(13.8)	2.2	—	A H I K	10	普通	にぶい橙		

5. ビット

代正寺遺跡からは、A—26グリッドから2基、B—22グリッドから1基のビットが検出されている。径0.32~0.50m、深さ0.43~0.70mである。覆

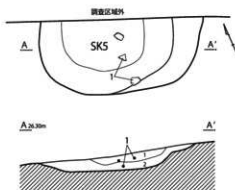
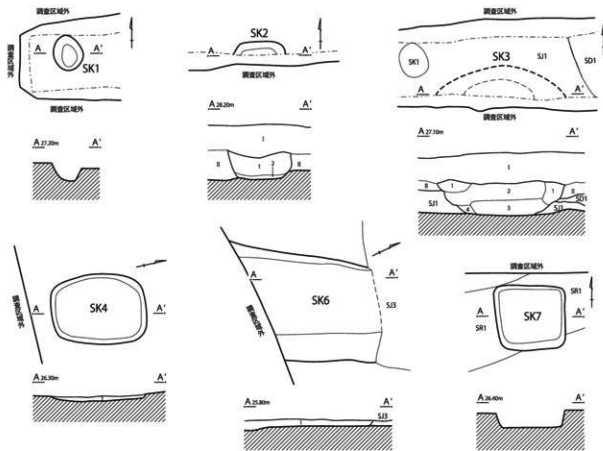
第5号土壌は、長軸2.55mと規模が大きく、中世の在地産片口鉢、かわらけが覆土中層から出土している。

第6号土壌は平面形が溝状を呈し、調査区内では長方形である。

第5号土壌出土遺物 (第16図)

1は全体にヘラナデが施されており、外面下半には指ナデが加えられている。底面は静止糸切りである。

土は黒褐色土で遺物は出土していない。覆土の様相から古墳時代前期のものと考えられる。



- 表土
I 暗褐色土 耕作土
II 黒褐色土 ロームブロック散見 しまりなし 粘性弱
SK 2
1 黒色土 ローム粒子散見 しまりなし 粘性弱
2 灰黄褐色土 ローム土主体 1層土混入
- 表土
I 暗褐色土 耕作土
II 黒褐色土 ロームブロック部分的に散見 しまりなし 粘性弱
SK 3
1 黒色土 ローム粒子散見 しまりなし 粘性弱
2 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック均等に少量含む しまりあり 粘性弱
3 黄褐色土 ロームブロック主体 しまり 粘性あり
4 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量 しまりなし 粘性弱
- SK 4
1 暗褐色土 ローム粒子・黒褐色土粒子少量
- SK 5
1 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック少量
2 暗褐色土 ローム粒子・黒褐色土粒子多量
- SK 6
1 黒褐色土 ローム粒子多量

SK5



第16図 土坑・出土遺物

V 大西遺跡の遺構と遺物

1. 住居跡

今回の調査では、弥生時代後期の住居跡1軒、古墳時代前期の住居跡4軒、平安時代の住居跡3軒が検出された。いずれも台地の平坦部に築かれ、分布が大きく3箇所に分かれている。

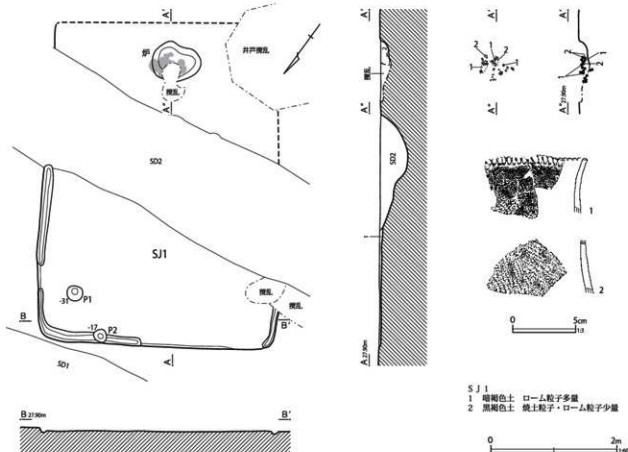
第1号住居跡（第17図）

弥生時代後期後半、吉ヶ谷式期の住居跡である。調査区の西側、B・C—2・3グリッドに位置する。攪乱が著しく、遺構の南側は削平されている。覆土は第2号溝跡によって切られている。

遺構の南側の様相は不明だが、炉跡の位置から全体は長方形と推定される。主軸方位はN—36°

—Wである。規模は、炉跡までの主軸方向4.80m、検出できた北半の規模は、主軸方向2.80m、短軸方向3.80m。確認面からの深さは0.05mである。覆土は、暗褐色土である。床面はほぼ平坦である。

床面の南側から炉跡が、北コーナー付近からピット2本、壁周溝が検出された。炉跡は長径0.80m、短径0.65mの不整楕円形で、皿状に掘り窪められており、底面がよく焼けていた。柱穴は双方とも円形である。P1は位置的に主柱穴の可能性がある。直径0.25m、深さ0.31mである。P2は北西壁際で壁周溝と重複している。直径



第17図 第1号住居跡・出土遺物

第10表 第1号住居跡出土遺物観察表（第17図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	弥生	甕	—	4.5	—	A E H I J K	5	良好	にぶい赤褐	No.14・19 No.3・13炉跡 炉跡	
2	弥生	甕	—	4.4	—	A C E H I J K	5	良好	橙	No.16・18・20炉跡	

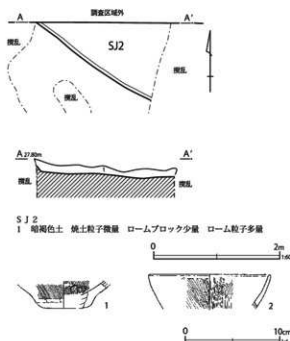
0.20m、深さ0.31mである。壁周溝との新旧は不明である。壁周溝は連続しないが、各壁沿いに認められる。幅0.10～0.20m、深さ0.05mで、自然堆積と考えられる。

遺物は弥生時代後期の壺、甕、高坏が出土した。炉跡に集中し、覆土中からは少量のみであった。

第17図1・2は甕である。1は口縁部で、端部に上方からヘラ状工具による刻み目が施されている。頸部以下は単節RLの縄文が施文されている。2は単節RLの縄文が施文された胴部である。1と同一個体の可能性もある。施文が乱れており、新しい傾向が見られる。

第2号住居跡（第18図）

古墳時代前期の住居跡である。B-3グリッドに位置する。遺構の北側は調査区域外にかかり、東西を掘乱により壊されている。遺構の南部が検出できたのみである。確認面直上まで掘乱が及んでいたので検出面は波打った状態であった。



第18図 第2号住居跡・出土遺物

第11表 第2号住居跡出土遺物観察表（第18図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	—	2.9	(6.0)	A E H I K	20	普通	にぶい褐	外面二次加熱	
2	土師器	小型高坏	(13.0)	3.6	—	A E H I K	10	良好	にぶい橙		

南壁の軸方位はN-55°-Wである。規模は、検出できた範囲で、南壁が2.15m、直交軸方向1.25mである。深さは0.15mである。覆土は、暗褐色土の単層である。床面は東側に傾斜し、やや凹凸がある。炉跡等の施設は検出できなかった。

遺物は少なく、覆土中から、古墳時代前期の壺、甕、小型壺、小型高坏が出土した。須恵器甕、近世陶器が混入して出土している。

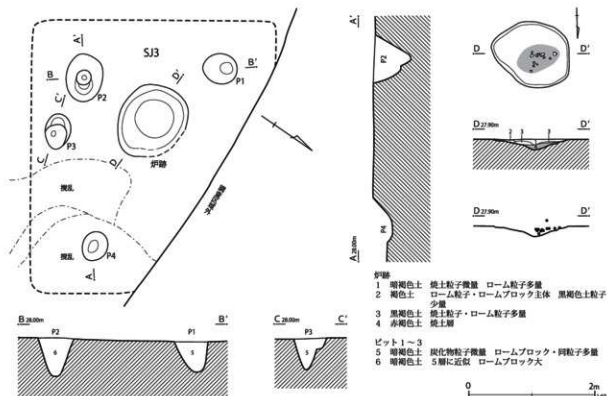
第3号住居跡（第19図）

古墳時代前期の住居跡である。B-2グリッドに位置する。遺構の北側は調査区域外にかかる。掘乱が床付近にまで及んでいるため、壁は検出できず、床面の施設が検出できたのみである。

炉跡や柱穴から推定される主軸方位はN-57°-Wである。規模は、推定で主軸方向4.30m、短軸方向3.40mである。床面は削平されているが、ほぼ平坦と考えられる。

削平を受けているが、炉跡、ピット2本が検出された。炉跡は中央より南西側に寄っている。長径1.25m、短径1.05mの不整楕円形で、大型である。皿状に掘り窪められており、底面がよく焼けていた。また、甕胴部の破片が出土している。柱穴はP 1・2・4が主柱穴の可能性がある。いずれも不整な楕円形である。P 1は長径0.55m、短径0.50m、深さ0.30mである。P 2は長径0.75m、短径0.60m、深さ0.60mである。P 3は長径0.55m、短径0.40m、深さ0.50mである。P 4は長径0.50m、短径0.40m、深さ0.50mである。覆土はローム土を多く含む暗褐色土で、埋戻しの可能性がある。

遺物は少なく、前述の炉跡以外は、覆土中から古墳時代前期と考えられる甕の小破片が出土しているのみである。



第19図 第3号住居跡

第4号住居跡 (第20・21図)

古墳時代前期の住居跡である。調査区のほぼ中央、B—8グリッドに位置する。攪乱が著しく、遺構の東側は床面まで削平されていた。床面全体から炭化物、焼土が検出されたことから、焼失家屋の可能性ある。

平面形は長方形である。主軸方位はN—2°—Wである。規模は、主軸方向4.00m、短軸方向3.70mである。深さは0.15mである。覆土は、焼土、炭化物を多く含む黒褐色土である。攪乱を受けているがほぼ平坦で、床面は傷みが著しいが、部分的に貼り床、掘り方が検出されたに過ぎない。

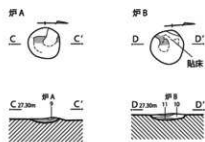
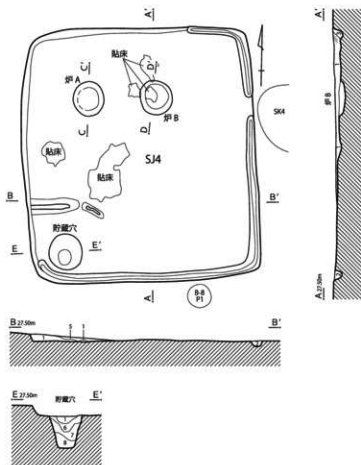
床面から炉跡2箇所、貯蔵穴、壁周溝が検出された。炉跡のうち炉跡Bは埋め戻されて貼り床が施されているため、炉跡Aは新しく造り直されたものと考えられる。炉跡A・Bとも径0.50mの不整円形である。炉跡Aは皿状に掘り窪められ、底面がよく焼けていた。炉跡Bも皿状に掘り窪められているが焼土は上面にのみ認められた。貯蔵穴

は径0.50~0.60mの円形で、深さは0.55mである。覆土はロームを多く含むことから、故意の埋戻しの可能性がある。北側に粘土の貼り付けによる幅0.10~0.20m、高さ0.03m程度の周堤帯が、長さ1.20m程の範囲で巡らされている。壁周溝は北壁の東側、東壁、南壁沿いに認められる。幅0.10~0.20m、深さ0.10mで、埋め戻されている。

掘り方には北西コーナーに、長径1.65m、短径0.90~1.00m、深さ0.10mの土壇状の掘り込みが認められた。また、貼り床除去後に柱穴が3基検出された。P2・3は、位置的に主柱穴の可能性がある。P1・3は楕円形、P2は円形である。規模は、P1が長径0.40m、短径0.30m、深さ0.41m、P2が長径0.60m、短径0.30m、深さ0.52m、P3が径0.30m、深さ0.53mである。P4・5の覆土は貼り床と同様の暗褐色土である。

床面は炉跡近辺を中心に焼土化している部分が認められ、全体の直上から炭化物が出土した。

遺物は南西コーナーの床面を中心に、古墳時代



S J 4

- 1 黒褐色土: 焼土粒子・ローム粒子・ロームブロック多量
炭化物粒子少量
- 2 暗褐色土: ローム粒子・ロームブロック極多量 貼床埋土
- 2' 黒褐色土: 2層と同様だが明度が落ちる
- 3 黒褐色土: 1層に似る 焼土粒子・炭化物粒子を含まない
- 4 黒褐色土: ローム粒子多量 肥正埋土
- 5 黒褐色土: 炭化物・ローム粒子・ロームブロック多量

貯蔵穴

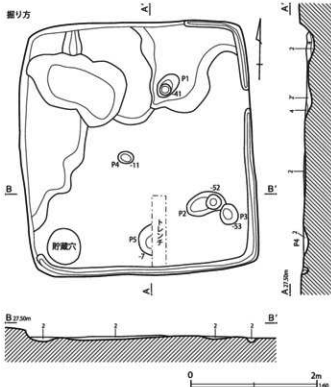
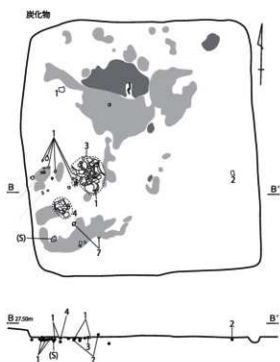
- 6 黒褐色土: ローム粒子多量
- 7 黒褐色土: ローム粒子・ロームブロック多量
- 8 黒褐色土: ローム粒子・ローム土の大きなブロック (φ 5cm) を少量含む

炉A

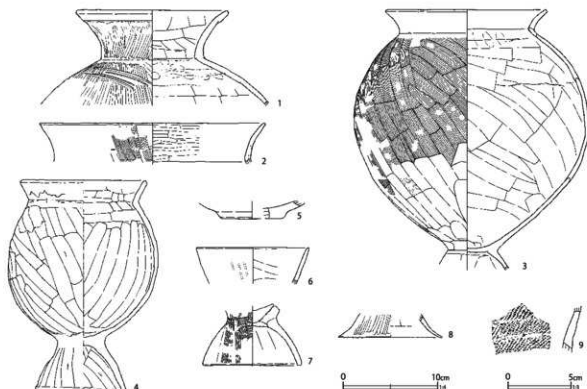
- 9 黒褐色土: 焼土粒子多量

炉B

- 10 黒褐色土: 焼土粒子・ローム粒子多量 少量
- 11 暗褐色土: ローム粒子・黒褐色土多量



第20図 第4号住居跡



第21図 第4号住居跡出土遺物

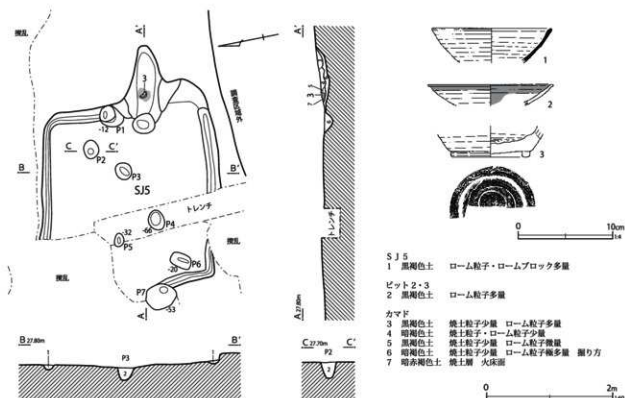
第12表 第4号住居跡出土遺物観察表 (第21図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(15.8)	10.1	—	AEH I J K	50	普通	にぶい橙	No.3・5・6・7・14・15・17・貯蔵穴	12-6
2	土師器	壺	(24.0)	4.4	—	AE I J K M	5	良好	黒褐	No.8 広口壺か	
3	土師器	台付甕	17.1	27.6	—	ACE H I K	90	良好	にぶい黄橙	No.4 肩部以下外面煤	12-7
4	土師器	台付甕	13.0	22.4	9.6	ACE I J K L	75	普通	明赤褐	No.2	12-8
5	土師器	壺	—	1.8	(7.0)	AEH I K	15	普通	褐灰		
6	土師器	小型壺	(12.0)	3.9	—	ACE H I K	10	良好	橙	貯蔵穴	
7	土師器	台付甕	—	6.5	(10.6)	AEH I K	40	普通	にぶい赤褐	No.1・9 貯蔵穴 外面黒褐色 内面二次加熱赤変	
8	土師器	高坏	—	2.5	(11.2)	AEH I K	10	普通	橙	貯蔵穴 外面赤彩	
9	土師器	甕	—	3.6	—	AE I K	5	普通	明褐		

前期の壺、甕、台付甕、小型壺、高坏が出土している。ほかに混入と考えられる弥生時代後期前半の壺、弥生時代後期後半の甕が出土した。

第21図1～8は古墳時代前期の土師器である。1・2・5は壺である。1は短めの複合口縁を呈する。複合部は端部に粘土が付加されて作出されている。複合部は薄めである。肩部に刃物の痕跡と考えられる傷があり、破片の状態で砥石替わりに利用されたと考えられる。2は広口壺のような器形と考えられる。粘土が精選され、口縁部内面に丁寧なヘラ磨きが施されていることから壺と判

断した。5は突出する底部で、風化のため調整は不明である。3・7は台付甕である。脚台部との接合部はホソ接合である。接合部は薄く、脚台部の天井に粘土が充填されて接合されている。7は低平な脚台部で、ホソ接合である。脛が脱落しており、接合面にナデが認められる。接合部外面の刷毛目は繰り返し施されている。6は小型壺の口縁部である。風化が著しい。8は高坏の脚部である。裾部はやや外側に開く。黄白色を呈する。9は弥生時代後期後半の古ヶ谷式の甕である。単筋LRの縄文が施されている。



第22図 第5号住居跡・出土遺物

第13表 第5号住居跡出土遺物観察表 (第22図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	杯	(13.0)	3.7	—	A E H I K	15	良好	灰黄		
2	灰軸陶器	皿	(13.6)	2.2	—	A I K	20	良好	灰黄	溝け掛け 浜北窯産	
3	灰軸陶器	壺	—	3.3	8.3	D H I	30	良好	灰白	No.1 狼投窯産	

第5号住居跡 (第22図)

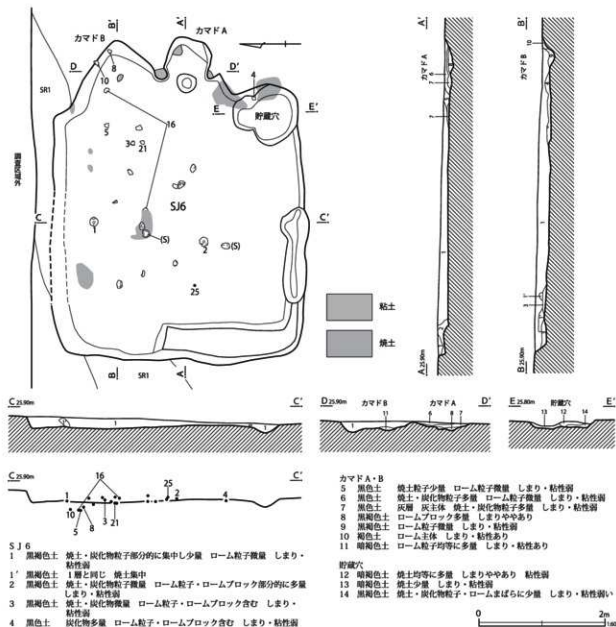
平安時代の住居跡である。調査区のほぼ中央、B・C—8グリッドに位置する。攪乱が床面にまで及び、カマドと壁周溝が検出されたのみである。北西コーナーは確認できなかった。

平面形は長方形である。主軸方位はS—80°—Eで、東カマドである。規模は、主軸方向4.05m、短軸方向2.95mである。深さは0.15mで、床面は西側が削平され、一段深くなっている。覆土は確認できなかった。

カマドは東壁のやや南寄りに設けられていた。覆土がほとんど削平されているため、燃焼面より下位の検出にとどまった。左右非対称で、カマドの南側はやや広がっている。規模は全長1.40m、幅1.20mである。燃焼部は壁を切り込んで造られ、

段を持たずに煙道に至る。燃焼部は幅0.30mで、ほぼ直線状である。底面の一部が焼土化しているのが確認できたが、それ以外の被熱は不明瞭であった。6層はカマドの掘り方である。袖は黄褐色粘土の貼り付けにより造られていた。焚口部の手前はビット状に掘り窪められている。煙道は長さ0.60m、幅0.40～0.50m、深さ0.05mである。

柱穴は7本検出された。位置としては、P2が主柱穴、P7が入り口部の施設の可能性がある。形態はP6が隅丸方形、P1・7が不整楕円形であるほかは円形である。規模は、P1が長径0.40m、短径0.30m、深さ0.10m、P2が長径0.30m、短径0.25m、深さ0.25m、P3が長径0.30m、短径0.25m、深さ0.25m、P4が長径0.30m、短径0.25m、深さ0.50m、P5が長径0.20m、短径0.15m、深さ0.10m、



第23図 第6号住居跡 (1)

P 6 が長径0.35m、短径0.25m、深さ0.20m、P 7 が長径0.50m、短径0.40m、深さ0.50mである。覆土は黒褐色土である。壁周溝はほぼ全周する。幅0.15～0.25m、深さ0.15mで、覆土は埋戻しの可能性がある。

遺物は少量で、平安時代の灰釉陶器の皿、長頸瓶、須恵器杯、捏鉢、壺、須恵系土師質土器の杯が覆土中から出土した。近世陶器、古墳時代前期の壺、甕、弥生土器の甕が混入している。

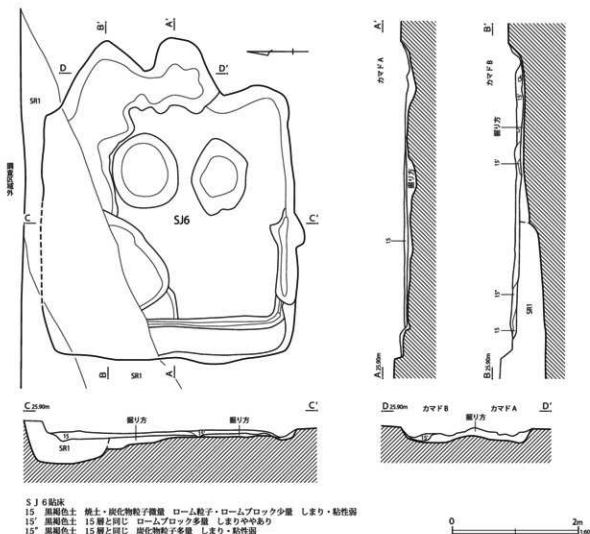
第22図1は須恵系の杯である。口縁部は直線的

である。埴山Ⅶ期である。2は灰釉陶器の皿である。浜北窯産。折戸53号窯段階である。漬け掛けである。3は灰釉陶器の長頸瓶である。底面静止糸切り。猿投窯産。黒笹90号窯段階である。

第6号住居跡 (第23～25図)

平安時代の住居跡である。調査区の東側、A・B—14・15グリッドに位置する。第1号方形周溝墓埋没後に本住居跡が掘り込まれている。南西側2mにやや時期の下る第7号住居跡がある。

平面形は長方形である。主軸方位はS—90°—



第24図 第6号住居跡(2)

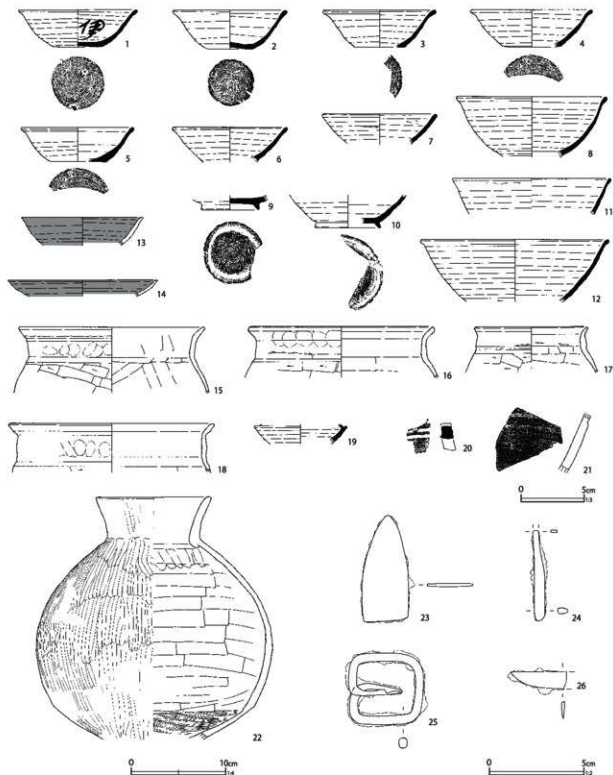
Eで、東カマドである。規模は、主軸方向5.05m、短軸方向4.10mである。深さは0.20mで、床面はほぼ平坦である。覆土は黒褐色土で、自然堆積と考えられる。全体に掘り方と貼り床が認められた。

カマドは2基検出された。カマドBは掘り方が大きく広がり、壊された状態で、BからAに造り替えられたと考えられる。

カマドAは袖が短く全体の平面形が不整な円形を呈する。規模は全長0.90m、幅0.60mである。燃焼部は壁を切り込んで造られ、煙道は削平されていると思われる。燃焼部は幅0.55mで、奥へ向かってやや広がっている。奥壁の一部が焼土化しているが、それ以外の被熱は不明瞭であった。

5・6層は天井部の崩落土の可能性はある。7層は灰層である。8層は掘り方と考えられる。袖は灰白色粘土の貼り付けにより造られ、よく焼けていた。焚口部の手前はビット状に掘り窪められている。カマドBは袖がなく、焚口側が広がり、全体の平面形が不整な三角形を呈する。規模は全長0.45m、幅1.10mである。燃焼部は壁を切り込んで造られ、煙道は削平されていると思われる。燃焼部は幅0.85mで、焼土化している部分やカマドの構築土と考えられる部分がなく、カマドを造り替える際に片付けられたと考えられる。

貯蔵穴は不整な円形がつながった形態で、北側から南側に造り直したと考えられる。長径1.00m、短径0.95m、深さ0.15mで、上層は焼土を多く含



第25図 第6号住居跡出土遺物

む。須恵器杯、土師器甕の小破片が出土している。

遺構南側の段差は、カマドB段階の南側壁を埋め戻して、カマドA段階の北側の壁を構築したた

めに生じたと考えられる。壁周溝は南壁の西側部分のみに認められるが、貼り床下からは段差の内側を巡って検出されている。幅0.10～0.20m、深さは0.03mである。覆土は埋戻しの可能性がある。

第14表 第6号住居跡出土遺物観察表 (第25図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	須恵器	坏	12.6	3.9	5.2	A B E H I J	100	普通	灰黄	No.7 内面墨書「伊」 内外面火押痕 南比企産	12-9
2	須恵器	坏	11.9	4.1	4.7	A E I J K	90	良好	灰黄	No.5 外面黒色付着物あり 外面火押 南比企産	13-1
3	須恵器	坏	(12.0)	3.9	(5.4)	E I J K	30	良好	にぶい黄橙	No.10 煤付着 南比企産	13-2
4	須恵器	坏	(13.0)	3.9	(6.4)	C E I J K	15	良好	灰	No.21 南比企産	13-3
5	須恵器	坏	(12.0)	3.6	(6.0)	I J K M	30	良好	浅黄	No.13 南比企産	
6	須恵器	坏	(12.2)	3.7	—	I J K	20	普通	灰白	カマドB 南比企産 火押多	
7	須恵器	坏	(12.2)	3.2	—	I J K	20	良好	にぶい黄橙	南比企産	16-4
8	須恵器	高台付埴	(16.0)	6.4	—	H I J K	15	普通	灰白	No.16 カマドB 床下 南比企産	
9	須恵器	高台付埴	—	2.5	6.1	E I J	80	良好	灰	床下 南比企産	
10	須恵器	高台付埴	—	3.4	(7.0)	E H I J K	40	普通	橙	No.15 カマドB 南比企産	16-4
11	須恵器	高台付埴	(17.0)	3.9	—	E H I K	10	良好	にぶい黄橙	床下 南比企産	16-4
12	須恵器	高台付埴	(20.0)	6.6	—	A B E H I J	15	普通	にぶい黄橙	カマドB 床下 南比企産	
13	灰釉陶器	埴	(12.9)	3.0	—	H I K	5	良好	灰白	床下 尾北窯産 全面施釉	
14	灰釉陶器	皿	(16.0)	1.7	—	I K	10	良好	灰黄	猿投窯産 全面施釉 K-90	16-4
15	土師器	甕	16.6	7.1	—	A E H I K	25	良好	橙	床下	13-4
16	土師器	甕	(19.6)	5.4	—	A C E H I K	30	良好	にぶい赤褐	No.14・17 床下	
17	土師器	甕	(12.0)	4.9	—	A B C H I K	20	良好	にぶい赤褐	床下	
18	土師器	甕	(21.8)	5.2	—	A E H I K	10	良好	にぶい赤褐	床下	16-4
19	須恵器	坏	—	2.1	—	I K	5	良好	灰	湖西窯産	16-4
20	須恵器	高坏	—	2.2	—	C E I K	5	良好	暗灰黄	長脚2段透穴 古墳後期	16-4
21	灰釉陶器	埴	—	4.8	—	I	5	良好	灰白	No.11 内面釉	16-4
22	土師器	壺	(11.6)	25.8	—	A E H I J K	55	普通	にぶい褐		13-5
23	鉄製品	鉄線	長さ5.6cm	幅2.45cm	厚さ0.2cm	重さ9.3g					16-9
24	鉄製品	棒状品	長さ4.7cm	幅0.55cm	厚さ0.35cm	重さ2.6g					16-9
25	鉄製品	鉸具	長さ4.1cm	幅0.55cm	厚さ0.5cm	重さ14.8g					16-9
26	鉄製品	刀子	長さ2.9cm	幅0.9cm	背幅0.2cm	重さ2.2g				No.4 刃部片	16-9

掘り方は不整形で、周溝墓の周辺からカマドにかけて溝状に掘り込まれ、中央に2箇所土塊状の掘り込みがある。貼り床はローム土、焼土、炭化物を含む黒褐色土である。掘り方からは土師器甕の破片が出土している。

遺物は少量で、覆土中から平安時代の灰釉陶器の埴、皿、須恵器坏、須恵器甕、土師器甕が床面近くから出土した。古墳時代前期の甕、小型壺、吉ヶ谷式甕が混入している。

第25図1～7は須恵器の坏である。いずれも底径が口径の2分の1以下で、口縁部は外反する。底面は回転糸切り。いずれも南比企産で鳩山Ⅷ期である。1は内面に「伊」の墨書がある。8～12は高台付埴である。深身で底径が小さく、高台は低い。9の底面は回転ヘラケズリ後ナデ。10の底面は回転糸切りである。10・12は酸化焰焼成である。いずれも南比企産で、鳩山Ⅷ期である。

13・14は灰釉陶器である。13は埴である。全面に施釉されている。尾北窯産で、黒笹90号窯段階である。14は皿である。全面に施釉されている。猿投窯産。黒笹90号窯段階である。

15～18は土師器甕である。いずれも口縁部がコの字状を呈する。胴部外面は刀子による横位のヘラケズリが施されている。19は古墳時代後期の須恵器坏である。湖西窯産。径が小さく7世紀前半と考えられる。20は古墳時代後期の高坏の脚部である。長脚2段の透穴が開けられている。21は灰釉陶器の埴である。下位はヘラケズリが施されている。

22は古墳時代前期の壺である。短めの単口縁が直立し、球形胴である。口縁部の形態が不自然で、二重口縁が剥離した可能性が考えられる。口縁部は剥離が著しく外面はヘラ磨きが僅かに確認できるのみで、内面は不明である。

23～26は鉄製品である。23は用途不明の製品で両丸造の鉄鎌の可能性ある。不明瞭だが下半は欠損していると思われる。24は棒状の鉄製品である。上位が細くなり、先端を欠失する。25は鉸具である。断面方形の鉄棒を折り曲げ、先端を鍛接して刺金としている。26は刀子である。刃部の切先部分である。

第7号住居跡（第26～32図）

平安時代の住居跡である。調査区の東側、B—14グリッドに位置する。第1号方形周溝墓埋没後に本住居跡が掘り込まれている。

平面形は歪んだ方形である。住居跡全体の主軸方位と、カマドの主軸方位が異なる。ここでは最も新しいカマドAのN—97°—Eを主軸方位とする。東カマドである。規模は、主軸方向4.92m、直交軸方向5.10mである。確認面からの深さは0.40mで、床面はほぼ平坦である。覆土は黒褐色土の単層である。全体に掘り方と貼り床が認められた。

カマドは3基検出された。いずれも軸は不明瞭である。カマドB・Cは住居跡全体の覆土が直線的にカマドを覆っており、造り直されたと考えられる。築造順序は確実にではないが、北、東壁を往復したとは考え難いことから、カマドC→B→Aの順序と考えられる。

カマドAは土壇状の燃焼部に、短い煙道が付くものである。規模は全長1.50m、幅0.66mである。燃焼部は壁を切り込んで造られ、段を持って短い煙道部に至る。覆土の様相から白色粘土の貼り付けによって構築されていたと推定される。燃焼部は幅0.50m、長さ1.20mの浅い土壇状を呈している。右側の壁の一部が焼土化しているが、それ以外の被熱は不明瞭であった。4層は天井の崩落土、5～8層は煙道からの流れ込みと考えられる。カマドBは、全体の平面形が不整な半円形を呈する。規模は全長0.75m、幅0.75mである。燃焼部幅は0.55mである。壁を切り込んで造られ、

煙道は削平されている。12層が灰層で、11・13・14層は被熱部分と考えられる。カマドCは、全体の平面形が不整な長楕円形を呈する。規模は全長1.00m、幅0.60mである。燃焼部幅は0.45mである。壁を切り込んで造られ、煙道は削平されている。20層が灰層で、17・19層は天井の崩落土と考えられる。

掘り方は不整形で、全体に一段深く掘り込まれている。貼り床はローム土を多く含む暗褐色土である。掘り方からは古墳時代の土師器甕の破片が出土している。

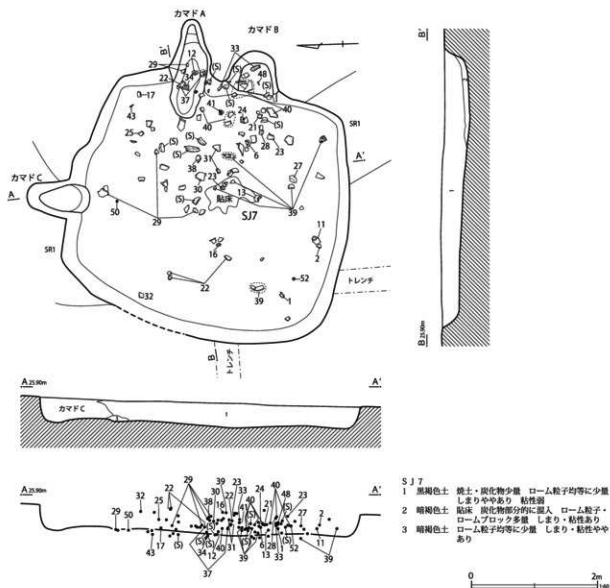
遺物は多く、覆土の中層から下層を中心に、平安時代の灰釉陶器の埴、皿、段皿、長頸瓶、須恵器の坏、高台付坏、甕、甗、須恵系土師質土器の坏、土師器甕、台付甕、紡錘車、鉄製品が床面近くから出土した。吉ヶ谷式甕、古墳時代前期の甕、高坏、古墳時代後期の坏、高坏が混入している。

第29図1・2は緑釉陶器の埴である。両者とも2次加熱を受け、釉が部分的に飛んでいる。尾北窯産。黒笹90号窯段階である。1は陰刻花文が施されている。2は外面下位に沈線が入れている。

3～10は灰釉陶器である。3～5が埴、6が段皿、7～9が皿、10が長頸瓶である。軸葉はいずれもハケ塗りである。6・8は部分的に釉が飛んでいる。9の見込みにはトチン跡がある。いずれも浜北窯産で、黒笹90号窯段階である。

11・12は須恵系土師質土器である。酸化焰焼成である。底径が口径の2分の1以下で、口縁部は外反する。底面は回転糸切りである。生産窯不明。風化が進んでいる。

13～32は須恵器である。16・17・18は酸化焰焼成である。13・15は南比企産。それ以外は生産窯不明である。13・14は高台付坏、15～18は坏である。いずれも底径が口径の2分の1以下で、口縁部は外反する。底面は回転糸切り。15の底部にはヘラ記号が見られる。17の外面はロクロナデ後ヘラナ

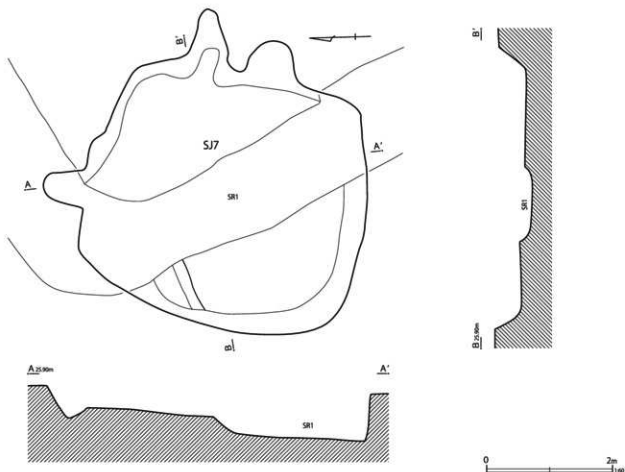


第26図 第7号住居跡(1)

デが加えられている。底面には棒状の工具の痕跡が見られる。18は見込みの中央までロクロ目が明瞭である。19・20は中型の壺である。外面は自然釉が厚くかかる。南比企産。21・22・25・26は壺である。22は外面、見込み、底面に自然釉が厚くかかっている。21・22は生産窯不明、25は南比企産、26は末野産である。23・24・27・28は甕である。胴部外面は平行タキ後ナデ、内面は青海波文が残る。底面は27がヘラケズリ、28がナデが施されている。23・24・28は生産窯不明、27・第30図29は南比企産である。30～32は甕である。胴部から底部の一部の破片のみしか認められない。いずれ

も南比企産である。30・31は高台が付き、下半はヘラケズリが施されている。

33～38は土師器甕である。いずれも口縁部が短く外反し肩が張る器形である。端部は摘み上げられるものと、丸く収められるものがある。33は端部に部分的にヘラによるオサエが見られる。胴部外面は刀子による横位のヘラケズリ、内面は34が刷毛目、他はヘラナデが施されている。39～42は大甕である。第31図39・40は胴部下半である。39は外面格子目タキ、内面青海波文が施されている。砂が周回して付着し、他の須恵器の破片が付着する。据え置いた時に付着したと考えられる。



第27図 第7号住居跡(2)

末野産。40は外面斜め方向の平行タタキ、内面は当て具痕がナデ消されている。底部近くの破片と考えられる。南比企産。41は頭部近くの破片で、外面平行タタキ、内面青海波文が施されている。生産窯不明。42は口縁部で5条1単位の波状文が施されている。外面は黒色を呈する。南比企産。

鉄製品は、釘、刀子、不明鉄製品がある。第32図43～47は釘である。43・45・46は頭部を叩き潰してL次形にされるもので、脚部を欠失する。46はやや小型である。44は頭が直裁されている。47は頭部、脚部を欠失し、折れ曲がっている。48は刀子の刃部である。両関で、刃関はなだらかで、背関は段を持っている。49は不明な鉄製品である。背側の直線的な部分のみが遺存している。50は銅製品である。用途は不明である。板状のものが折り曲げられている。

51は凝灰岩製の砥石の破片である。下端は欠損

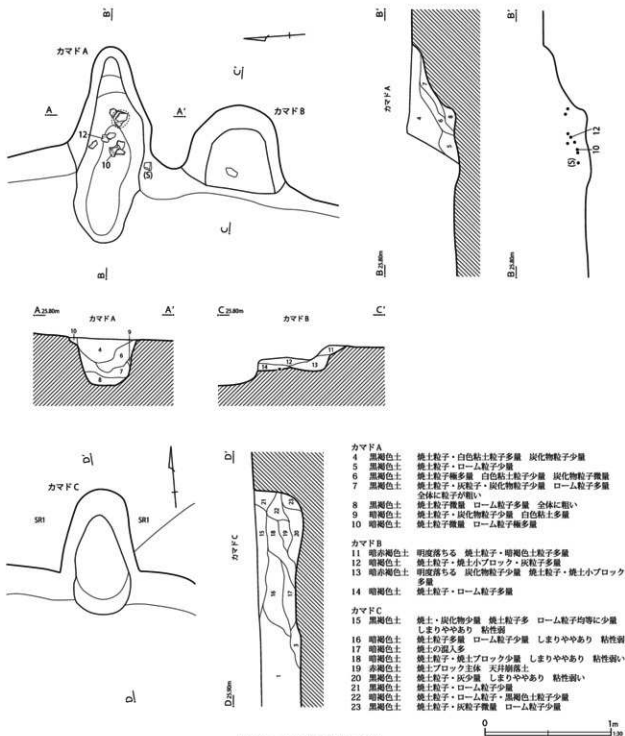
後、再利用されている。黒色を呈し、被熱したと考えられる。樹脂らしき付着物がみられる。

52は緑泥石製の紡錘車である。逆台形を呈する。非常に丁寧に磨かれており、光沢がある。軸穴には使用痕と考えられる擦痕がある。表面に「大田」の刻書がある。その右側に小さく「人」と見えるが、文字であるかは判別できない。

第8号住居跡(第33図)

古墳時代前期の住居跡である。調査区の西側、B・C—14・15グリッドに位置する。第9号住居跡を切り、本住居跡埋没後に第1号方形周溝墓、第7・8号土壌が掘り込まれている。重複のため、遺構の西側は明瞭に把握できなかった。

平面形は隅丸方形と推定される。主軸方位はN—28°—Wである。規模は、検出範囲で主軸方向2.55m、第8号土壌までの直交軸方向で3.06mである。深さは0.36～0.45mで、床面は南側へ向



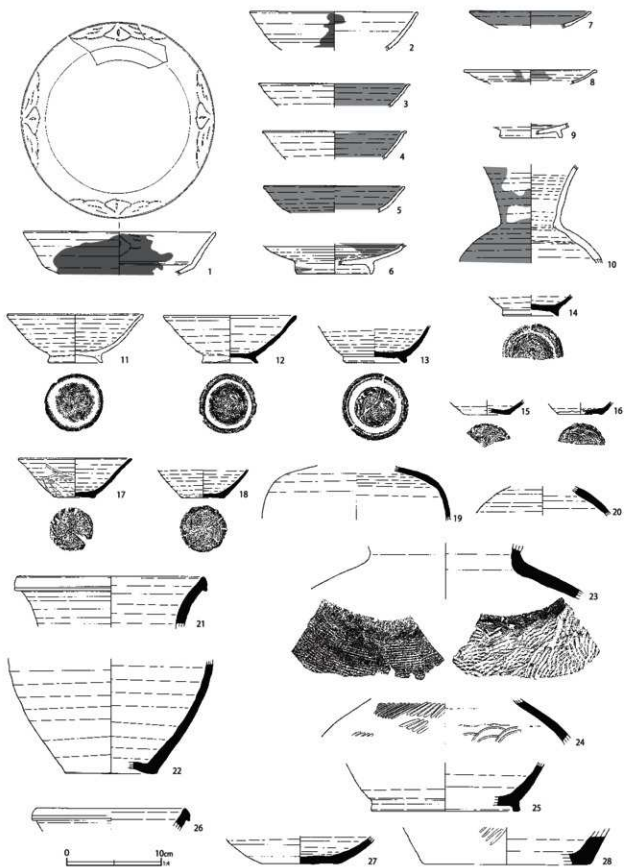
第28図 第7号住居跡 (3)

かって傾斜している。覆土は、ローム土を含む黒褐色土である。床面はほぼ平坦である。

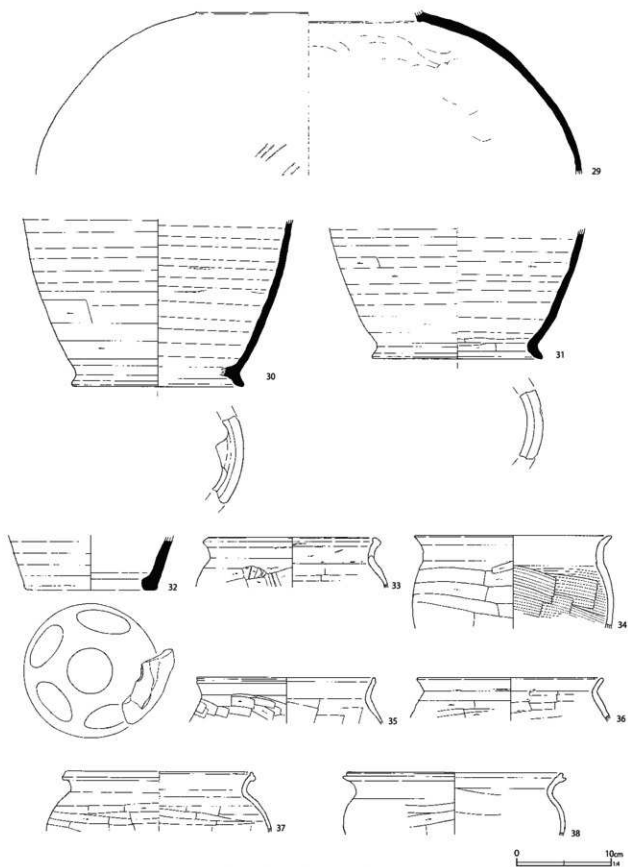
北東コーナー近くから炉跡が検出された。径0.35m、深さ0.05mの不整形円形である。皿状に掘り窪められ、粘土が充填された上面がよく焼けて硬化していた。

遺物は床面からまとまって、古墳時代前期の壺、甕、台付甕が出土している。

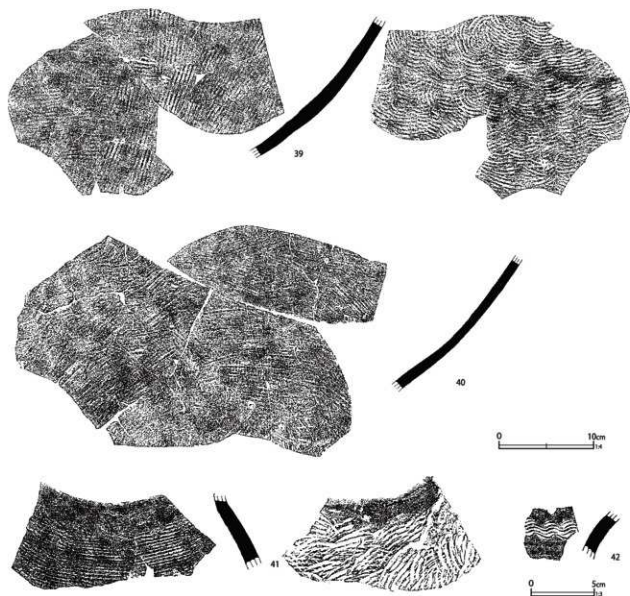
第33図1は壺の胴部である。粘土帯の接合単位で亀裂が多く入っている。底部は薄い輪台状を呈する。3は小型の台付甕である。脚上部との接合部はホゾ接合である。脛が大きい。口縁端部に板



第29図 第7号住居跡出土遺物(1)



第30図 第7号住居跡出土遺物（2）



第31図 第7号住居跡出土遺物（3）

状の工具による押捺が施されている。4も同様の資料だが球形胴を呈している。口縁端部には左前方からヘラによる押捺が施されている。

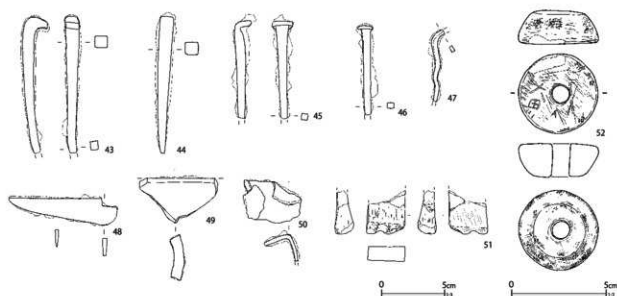
本住居跡は第9号住居跡と重複しており、一括して取り上げた遺物があるため、本項で報告する（第34図）。1・2は古墳時代前期のものである。1はS字状口縁台付甕である。台付甕を加工した感を受ける。頸部には深い二重の沈線が巡る。胴部は刷毛目後肩部に横位の刷毛目に加えられている。2は鉢である。口縁部外面に単節LRの縄文が施文されている。3は弥生時代中期後半の高坪

の口縁部と考えられる。端部に内傾する粘土帯が貼付されて、口縁部が作出されている。

第9号住居跡（第35図）

古墳時代前期の住居跡である。調査区の西側、B・C—14・15グリッドに位置する。本住居跡埋没後に、第8号住居跡、第1号方形周溝墓、第7・8号土壇が掘り込まれている。多くの遺構と重複するため、西側は明瞭に把握できなかった。

平面形は隅丸方形と推定される。貯蔵穴側を入口とすると、主軸方位はN—35°—Wである。規模は、主軸方向2.95m、直交軸方向1.98mである。



第32図 第7号住居跡出土遺物(4)

第15表 第7号住居跡出土遺物観察表(第29~32図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	緑釉陶器	埴	(20.8)	4.1	—	IK	10	良好	灰白	No.2 陰刻花文 尾北窯産	13-6
2	緑釉陶器	埴	(17.6)	4.1	—	IK	10	良好	灰	No.12 尾北窯産	16-5
3	灰釉陶器	埴	(16.0)	2.5	—	IK	10	良好	灰白	内面施釉 浜北窯産	16-5
4	灰釉陶器	埴	(15.2)	3.0	—	IK	5	良好	灰白	内面施釉 浜北窯産	16-5
5	灰釉陶器	埴	(15.0)	2.8	—	H IK	5	良好	灰白	浜北窯産	16-5
6	灰釉陶器	段皿	—	3.3	(8.0)	H IK	40	良好	灰白	No.33 内外面施釉 浜北窯産	16-7
7	灰釉陶器	皿	(13.0)	1.8	—	IK	25	良好	灰白	内外面施釉 浜北窯産	16-5
8	灰釉陶器	皿	(14.0)	1.5	—	IK	5	良好	灰白	内外面施釉 浜北窯産	16-5
9	灰釉陶器	皿	—	1.6	(6.7)	IK	20	良好	灰白	内面施釉 浜北窯産	16-5
10	灰釉陶器	長頸瓶	—	7.4	—	IK	20	良好	灰白	No.108 外面施釉 浜北窯産	16-6
11	須恵系土師	高台付埴	(14.4)	5.2	5.7	AE IK	30	普通	にぶい黄褐色	No.11 黒色処理か 生産窯不明	
12	須恵系土師	高台付埴	(14.2)	5.0	6.0	CE I	40	良好	橙	No.84・113 見込み部分煤付着 生産窯不明	
13	須恵器	高台付埴	—	3.9	6.4	AE I J K	40	良好	灰黄	No.6 南比企産	
14	須恵器	高台付埴	—	2.3	(6.0)	AE H I	40	普通	灰黄	生産窯不明	
15	須恵器	埴	—	1.5	(5.0)	ACE J	20	普通	灰黄	底部へう記号 南比企産	
16	須恵器	埴	—	1.3	(4.6)	AE H I K	40	普通	橙	No.18 生産窯不明	
17	須恵器	埴	12.2	4.1	4.4	AE H I K	70	普通	にぶい黄褐色	No.90 土師質 生産窯不明	13-7
18	須恵器	埴	—	3.0	4.4	ACE H I K	50	普通	にぶい黄褐色	土師質 生産窯不明	
19	須恵器	壺	—	5.7	—	EH I J K	10	良好	灰黄	自然釉厚くかかる 南比企産	16-7
20	須恵器	壺	—	3.2	—	AI J K	15	良好	灰黄褐色	外面降灰 自然釉厚い 南比企産	16-7
21	須恵器	壺	(19.8)	5.5	—	AE H I K	10	普通	灰	No.64 生産窯不明	16-7
22	須恵器	壺	—	12.1	(10.0)	E I K	20	良好	灰黄	No.17・21・22・87 床下 生産窯不明	16-6
23	須恵器	甕	—	6.0	—	AE I K	20	良好	灰	No.31・43 生産窯不明	16-7
24	須恵器	甕	—	4.8	—	AH I	5	普通	灰黄褐色	No.70 生産窯不明	16-7
25	須恵器	壺	—	5.2	(16.0)	AE I J K	25	良好	暗灰黄	No.57 南比企産	13-8
26	須恵器	壺	(16.0)	2.4	—	EH I	5	良好	灰	末野産	
27	須恵器	甕	—	2.9	8.6	AE I J K	10	普通	にぶい黄	No.10 南比企産	
28	須恵器	甕	—	3.9	18.0	AE I K	5	良好	灰黄褐色	No.32 生産窯不明	
29	須恵器	甕	—	12.4	—	AE I J K	10	良好	褐色	No.25・52・59・85・86 南比企産	16-6
30	須恵器	瓶	—	17.7	(18.0)	ACE I J K	10	普通	灰黄	No.46 内面煤 南比企産	
31	須恵器	瓶	—	13.8	(18.0)	ACE H I J K	10	普通	灰黄	No.45・48 南比企産	

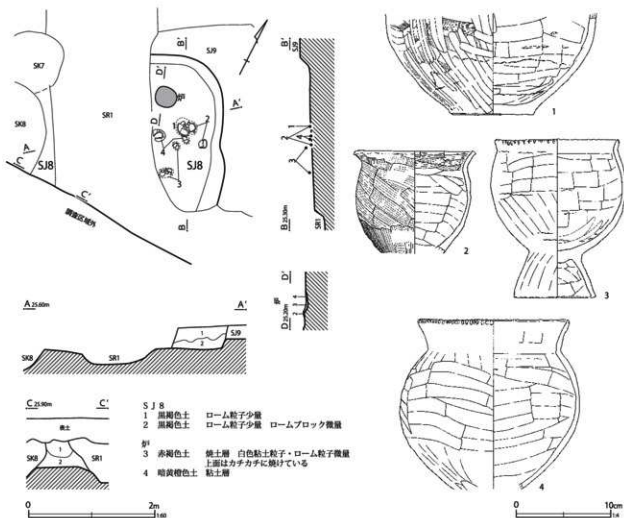
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備 考	図版
32	須恵器	甗	—	5.8	(14.0)	ACH I J	15	良好	灰黄	No23 生産窯不明	
33	土師器	甗	(17.6)	5.4	—	A E H I K	40	良好	にぶい赤褐	No71・79	13-9
34	土師器	甗	(21.0)	9.8	—	A E H I J K	20	良好	明赤褐	No89	
35	土師器	甗	(19.0)	4.9	—	A E H I	15	普通	橙		
36	土師器	甗	(19.8)	4.6	—	A E H I K	20	普通	にぶい赤褐		
37	土師器	甗	(19.8)	5.3	—	A E H I J K	40	良好	にぶい橙	No83・87 外面煤	
38	土師器	甗	(23.0)	6.6	—	A C E H I K	5	良好	橙	No47	
39	須恵器	大甗	—	—	—	A B E I	20	良好	灰	No7・14・15・37・40・44・104 未野産	13-10
40	須恵器	大甗	—	14.5	—	A E J K	30	良好	灰	No61・72・73・74・76・91・92・95 南比企産	14-1
41	須恵器	大甗	—	6.0	—	A E I K	5	普通	灰	No93 生産窯不明	
42	須恵器	大甗	—	4.1	—	A E I J K	5	良好	黒褐	No61・72・73・74・76・91・92・95 南比企産	16-7
43	鉄製品	釘	長さ7.2cm	幅0.7cm	厚さ0.6cm	重さ13.5g				No4 脚部先端欠	16-9
44	鉄製品	釘	長さ7.0cm	幅0.7cm	厚さ0.7cm	重さ12.5g				脚部先端欠	16-9
45	鉄製品	釘	長さ5.1cm	幅0.6cm	厚さ0.5cm	重さ6.4g				脚部先端欠	16-9
46	鉄製品	釘	長さ4.7cm	幅0.4cm	厚さ0.3cm	重さ5.5g				脚部先端欠	16-9
47	鉄製品	釘	長さ3.8cm	幅0.35cm	厚さ0.2cm	重さ1.9g				頭部・脚部先端欠	16-9
48	鉄製品	刀子	長さ5.85cm	刃幅1.4cm	背幅0.2cm	重さ6.1g				No3 茎先欠	16-9
49	鉄製品	不明品	長さ4.2cm	幅2.4cm	厚さ0.5cm	重さ20.2g					16-9
50	鉄製品	不明品	長さ3.1cm	幅2.2cm	厚さ0.2cm	重さ9.9g				No5 銅 鋳造品	16-9
51	石製品	砥石	長さ3.4cm	幅3.2cm	厚さ1.3cm	重さ16.0g	凝灰岩			SJ7一括 上半部欠損 付着物あり	
52	石製品	紡錘車	上径4.2cm	下径2.8cm	厚さ1.8cm	孔径1.0cm	重さ47.6g			No1 表面に「大田」	14-2
			緑泥石								

深さは0.24mである。覆土は、ロームブロックを多く含む黒褐色土の単層で、埋め戻された可能性がある。床面はほぼ平坦である。

床面東隅からは貯蔵穴、柱穴が検出された。不整楕円形で、長径1.08m、短径0.90m、深さ0.40mである。覆土は、ローム土を含む黒褐色土、暗褐色土で、埋め戻された可能性がある。柱穴は貯蔵穴に接して造られ、長径0.48m、短径0.40m、深さ0.50mである。上層から第35図3の高坪が出土しているが、位置的に方形周溝竈に帰属する可能性がある。

遺物は少量で、古墳時代前期の壺、甗、台付甗、高坪が覆土中から出土している。

第35図1は壺の口縁部である。東海地方西部系のバレス壺である。複合部は断面三角形を呈し、外面に4条の平行沈線、内面にヘラ描きによる綾杉文が施されている。外面には3本1単位の棒状浮文が貼付されているが、破片のため貼付された単位は不明である。2は高坪の脚台部と考えられる。台付甗の脚台部である可能性もある。内面の天井部跡には砂が付着している。3は高坪である。台付甗の製作途上で下半を高坪に転用したと考えられる。ホゾ接合である。口縁部は擬口縁状で乾いてから処理したと考えられ、凹凸が著しい。接合部の外面にはナデつけた粘土が据れて付着している。



第33図 第8号住居跡・出土遺物

第16表 第8号住居跡出土遺物観察表 (第33図)

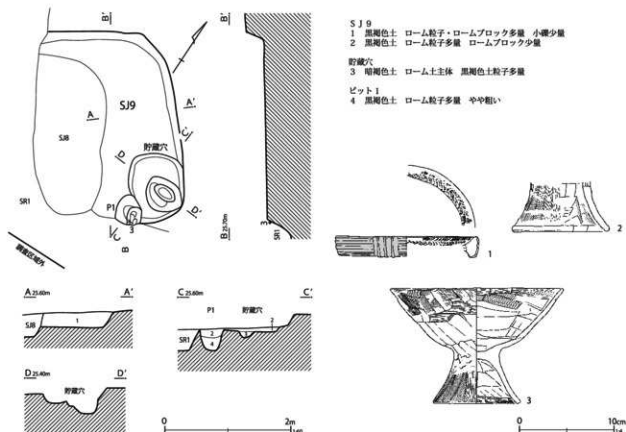
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	—	10.7	8.8	ACEGHIJK	75	普通	にぶい橙	No.4	14-3
2	土師器	台付甕	12.4	10.7	—	A E H I K	95	普通	にぶい褐	No.4・6 内面コケ 外面下半二次加熱赤変	14-4
3	土師器	小型台付甕 (13.0)	16.7	8.7	—	A C E H I J K	55	普通	にぶい橙	No.1・3・SR1c・d・SD8・9 外面煤附着 赤変	14-5
4	土師器	台付甕	16.0	17.9	—	A E H I K M	70	普通	橙	No.2・5・SR1d 外面全体赤変 煤附着	14-6



第34図 第8・9号住居跡出土遺物

第17表 第8・9号住居跡出土遺物観察表 (第34図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	S字甕 (16.0)	5.5	—	—	A E G H	5	普通	褐灰	SR1c・d 区に同一のものありか	
2	土師器	鉢 (17.8)	3.8	—	—	A E H I K	15	良好	にぶい褐		
3	弥生	高杯 (14.5)	1.6	—	—	A E H I K	5	普通	黄灰		



第35図 第9号住居跡・出土遺物

第18表 第9号住居跡出土遺物観察表 (第35図)

番号	種別	溝種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(15.0)	2.2	—	A E H I	20	良好	橙	No.1 外面赤彩 内面赤彩の痕跡不明	
2	土師器	高坏	—	5.2	(10.0)	A E H I K M	20	良好	にぶい橙		
3	土師器	高坏	(18.2)	12.2	(9.4)	A H I J K	50	普通	にぶい黄橙	No.1・5・P-I・SR1c・SR・9	14-7

2. 方形周溝墓

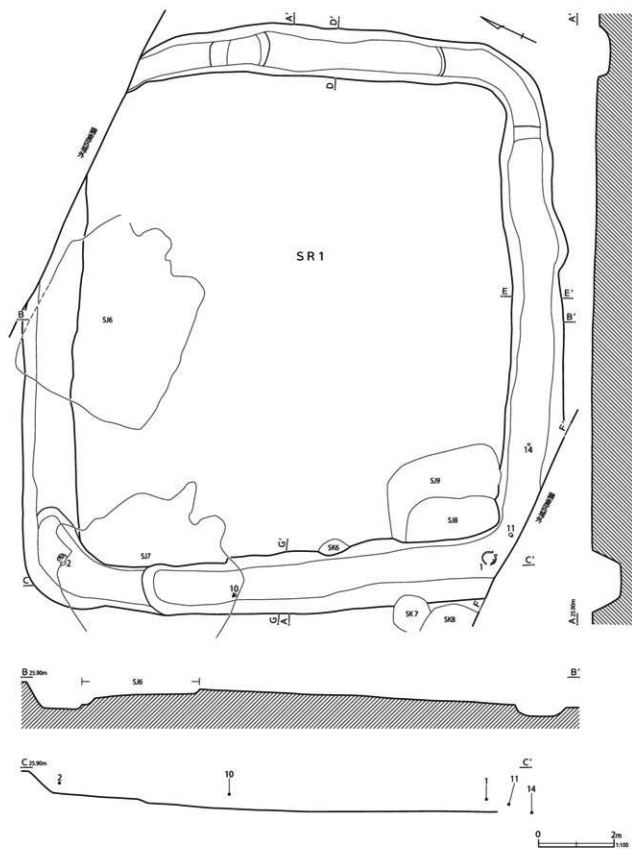
今回の調査では、古墳時代前期の方形周溝墓が1基検出されている。これまで市教委第2次調査区等からの検出例があるが、本周溝墓が地形的に分布の東限に当たると考えられる。

第1号方形周溝墓 (第36～38図)

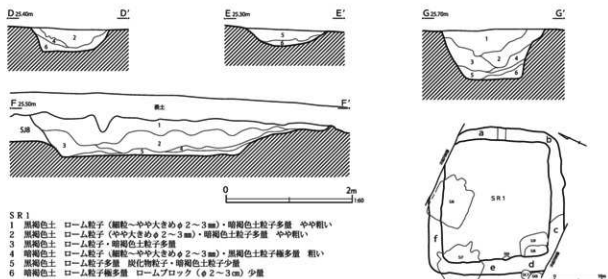
A～C—14～16グリッドに位置する。南西、北東のコーナーが調査区域外にかかる。第8・9号住居跡埋没後に掘り込まれ、埋没後に第6・7号住居跡、第6～8号土壌が掘り込まれている。第6・7号住居跡の存在から、平安時代には既に方台部は削平され、盛土等はなかったと考えられる。

各周溝は直線的で、コーナーで幅を減じること

から、全体の平面形は隅丸長方形を呈する。方台部側がやや直線的で、長方形に近い。長軸方位はN—64°—Eである。周溝外側は、長軸15.5m、短軸14.3mである。方台部の規模は、長軸13.0m、短軸11.8mである。各周溝の規模は北溝が、幅1.35～1.50m、深さ0.53～0.68mで、底面はほぼ平坦である。北西コーナーは一段深くなっている。西溝は幅1.10～1.80mで、北西コーナーから更に一段深くなり、深さ0.75mである。南溝は幅1.00～1.80mで浅くなり、深さ0.28～0.47mである。東溝は細く、浅い。幅0.70～1.36m、深さ0.23～0.30mである。北寄りに一段深さ0.18mほどの土



第36图 第1号方形周溝墓(1)



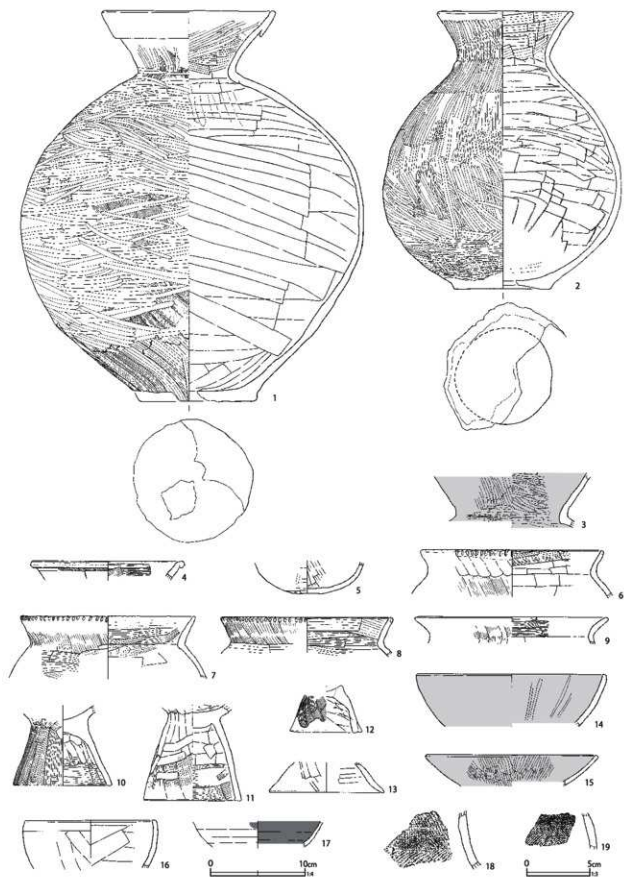
第37図 第1号方形周溝墓(2)

墳状の落ち込みがある。各溝の深さは確認面からの計測であり、本調査では攪乱による地山の傷みが著しいため底面レベルを比較した。それによると、最も深いのが南西コーナー付近で、南溝、西溝が深く、北溝、東溝が浅い。覆土は自然堆積である。第5・6層はロームブロックが多く、方台部の崩落土の可能性が高い。

遺物は少なく、ほとんどが南西コーナー付近を中心に出土している。底部穿孔壺(第38図1)は南西コーナー下層、2は中層からの出土である。覆土の状態からは溝底に据え置かれたものではなく、方台部肩から転落したものと考えられる。この他、古墳時代前期、平安時代の土器が混入していた。周溝の調査では、a～f(第37図)に分割して遺物を取り上げた。

第38図1～4は壺である。1・4は複合口縁、2は単口縁である。3は大型の壺になる可能性がある。1は底部穿孔壺である。穿孔は内側から行われている。胴部の成形は5段階である。底部外周は一枚剥離して下地の刷毛目が見えている。底部は非常に傷み、底面はヘラケズリである。2は底部穿孔壺である。穿孔は内側から行われてい

る。胴部は1同様に底部外周が一枚剥離して下地の刷毛目が見えている。胴部下位に器面が非常に傷んでいる部分がある。底面はヘラ磨きである。5は小型壺である。底面はヘラケズリ後ナデが加えられている。6～9は甕の口縁部である。端部は丸く収められている。6～8は左側から、6が棒状工具、7が木口状工具、8がヘラ状工具によって刻み目が施されている。10～12は台付甕である。11は大型、12は小型である。いずれもホゾ接合である。上位から臍を挿入後天井部に粘土を充填して接合している。10は天井部の粘土が異なり、12は臍が脱落している。12は端部外周に粘土が着せられており、それが全体に剥がれている。13～15は高坏である。14・15は坏部である。14の外周は剥離している。16は埴としたが、高坏の坏部の可能性もある。17は灰釉陶器の埴である。内外面ハケ塗り。内面の釉が厚い。猿投窯産で、黒笹90号窯段である。18は壺の肩部である。単節LRの縄文施文後刷毛目が施され、弥生土器の可能性が高い。19は壺の胴部の破片である。単節RL、単節LRの細縄文に円形朱文が配されている。



第38图 第1号方形周溝墓出土遺物

第19表 第1号方形溝墓出土遺物観察表 (第38図)

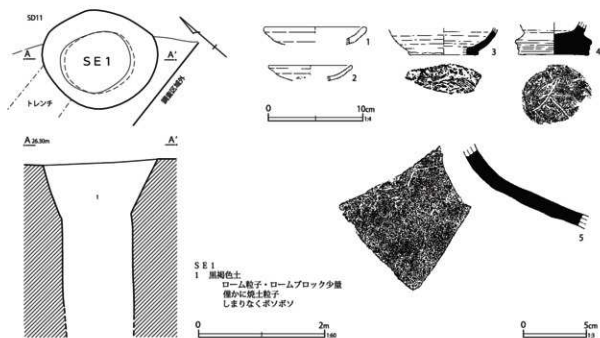
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	壺	(18.0)	41.3	(12.4)	ACEHIK	70	良好	浅黄橙	No.1 底部穿孔	14-8
2	土師器	壺	14.0	29.3	(10.4)	ACEHI	100	良好	浅黄橙	No.5 底部穿孔	15-1
3	土師器	壺	—	5.8	—	AHEHIK	20	良好	にぶい黄橙	d 内外面赤彩	
4	土師器	壺	(16.0)	2.0	—	AHEHIKM	10	普通	にぶい橙	d	
5	土師器	小型壺	(3.0)	3.4	—	EFHIK	10	普通	橙	d	
6	土師器	甕	(19.0)	5.1	—	ACEHIJK	20	普通	橙	c・d	
7	土師器	甕	(18.4)	6.6	—	AHEHIJK	25	良好	黒褐	No.1・d 外面煤	15-2
8	土師器	甕	(18.0)	4.2	—	AHEHIJK	15	普通	橙	c 外面煤	
9	土師器	甕	(20.0)	2.9	—	AHEHIK	5	普通	橙	e 内外面赤変	
10	土師器	台付甕	—	8.4	(10.2)	AHEHIK	80	普通	にぶい橙	No.4	
11	土師器	台付甕	—	10.2	(10.4)	AHEHIJK	60	普通	にぶい黄褐	No.1・2・d	
12	土師器	台付甕	—	5.0	(7.6)	ABEHK	90	普通	橙	d	
13	土師器	高坏	—	3.2	(12.0)	ACEHIK	10	普通	にぶい橙	c	
14	土師器	高坏	(19.6)	5.6	—	AHEHIK	15	普通	橙	No.3 内外面赤彩	
15	土師器	高坏	(18.0)	3.8	—	AHEHIK	10	普通	にぶい橙	d 内外面赤彩	
16	土師器	埴	(13.8)	5.1	—	AHEHIK	5	普通	にぶい黄橙	c 外面煤	
17	灰釉陶器	埴	—	2.9	—	AIK	5	良好	灰白	d 猿投窯産	
18	弥生	壺	—	4.8	—	ACEHIK	5	普通	にぶい橙	b 宮ノ台か	
19	土師器	壺	—	3.0	—	AHEHIK	5	普通	橙	f 赤彩	

3. 井戸跡

第1号井戸跡 (第39図)

今回の調査では中世の井戸跡が1基検出されている。調査区の西側、小支谷に面したC-12グリッドに位置する。第11号溝跡の覆土を切って掘り込まれている。

平面形は不整な楕円形である。床面は黄褐色の砂礫層まで掘り込まれている。長軸の方位はN-40°-Wである。長軸1.85m、短軸1.56mである。深さ2.42mまで掘削したが底面には達せず、更に1mのピンポールを刺したが底面には至らなかった。



第39図 第1号井戸跡・出土遺物

第20表 第1号井戸跡出土遺物観察表 (第39図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	かわらけ	皿	(10.8)	1.8	—	AE I J K	10	普通	にぶい褐	下半にしわ状の振れ 東金子産 回転糸切り 「大」の刻書あり	16-2
2	かわらけ	皿	(9.0)	1.6	—	A I K	20	普通	にぶい橙		
3	須恵器	坏	—	2.9	(7.0)	E I K	5	良好	灰白		
4	須恵器	捏鉢	—	3.4	(7.5)	A E H I K	80	良好	黄灰		
5	常滑	甕	—	6.7	—	A E H I	5	普通	灰		

た。覆土は黒褐色土の単一層でしまりを欠く。

遺物は、覆土中から中世のかかわらけ、常滑焼が出土している。そのほかに混入と考えられる平安時代の須恵器坏、捏鉢、甕、土師器甕、古墳時代前期の壺、甕、高坏が出土している。

4. 溝跡

今回の調査では、古墳時代前期の溝跡が2条(第11・12号溝跡)、近世の溝跡が10条検出されている。概要は第21表のとおりである(第40図)。

第2号溝跡は東西方向から南北方向に直角に曲がり、何らかの区画溝と考えられる。第3号溝跡は幅2～3mで、規模が大きい。

第11号溝跡は、直交する同時期の第12号溝跡と

4は須恵器の捏鉢である。底面に「大」の刻書が見られ、非常に焼成が良い。5は常滑焼の大甕の破片である。外面は灰が多くかかる。石英粒を多く含む。

ともに方形周溝墓である可能性が考えられる。

出土遺物は、第11号溝跡から弥生時代中期後半の壺、甕、高坏、鉢が出土している他は、18世紀後半から19世紀前半の陶磁器類である。古墳時代前期の土器が混入している。

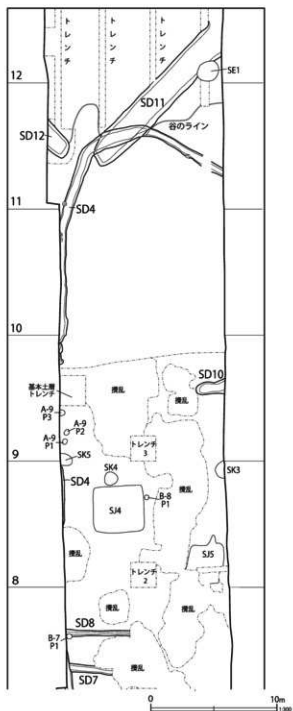
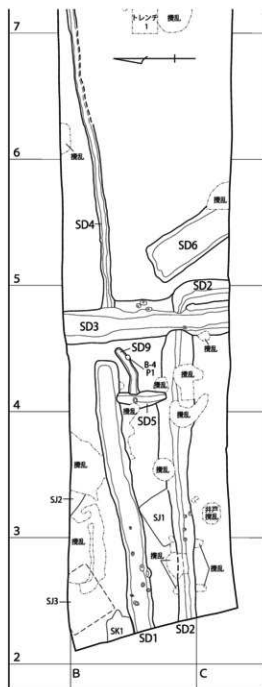
第2号溝跡出土遺物 (第41図1～6・24)

2は内外面鉄釉が、3は内面に灰釉が施され

第21表 溝跡一覧表 (第40図)

単位: m

遺構名	時期	グリッド	重複	軸方位	長さ	幅	深さ	断面形	遺物	備考
1号溝	近世	B-2~4	SK1より古	N-82°-E	21.60	1.65~2.10	0.50	逆台形	近世陶磁器 焙焼土師器 須恵器	
2号溝	近世	B-2~5・C-5	SD3より古	N-86°-E N-6°-W	29.60	1.30~3.05	0.4~0.7	薬研・逆三角形	近世陶磁器 焙焼土師器 須恵器 煙管	
3号溝	近世	B・C-4	SD2より新	N-2°-W	13.15	2.40~3.05	0.80~1.00	逆台形	近世陶磁器 瓦 かわらけ 土師器 古銭	
4号溝	近世	A-9~12 B-4~7・11・12 C-12	SD7より古	N-87°-E 東西 S-30°-W	60.30	0.50~1.35	0.15~0.30	逆台形	近世陶磁器 弥生土器 土師器 須恵器	
5号溝	近世	B-4		南北	3.90	0.80~1.20	0.50	逆台形	近世陶器 土師器 須恵器	SD1・2を連結
6号溝	近世	B・C-5		N-35°-W	7.45	2.80~3.15	0.45	逆台形	近世陶磁器 焙焼土師器	
7号溝	近世	B-7	SD4より新	N-2°-E	3.40	0.55~0.65	0.10~0.20	逆台形	土師器	
8号溝	近世	B-7		南北	6.00	0.40~0.54	0.15~0.25	逆台形	なし	
9号溝	近世	B-4		N-55°-E	4.10	0.60~0.85	0.10	皿形	土師器	
10号溝	近世	C-9		N-7°-W	2.30	0.90~1.25	0.25	逆台形	なし	
11号溝	古墳前期	B・C-11・12	SD4・SE1より古	N-46°-W	14.20	2.20~2.50	2.20~2.50	逆台形	弥生土器 土師器 須恵器 近世陶器	
12号溝	古墳前期	A・B-11		N-45°-E	2.50	1.60	2.50	逆台形	なし	



第40図 溝跡

ている。4は広東碗で、見込みに呉須で圈線と「寿」字が入られている。5は鉢である。内外面灰釉。6は混入の古墳時代前期の甕である。24は煙管である。中に鉄釘が入った状態である。

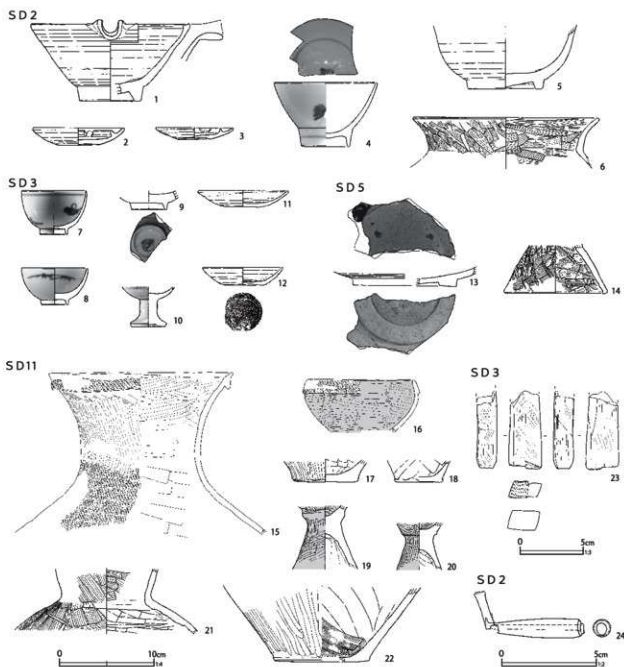
第3号溝跡出土遺物 (第41図7～12・23)

陶磁器類は、いずれも18世紀後半から19世紀前

半のものである。9は高台内に「福」字が描かれている。11の内面は鉄軸が施され、外面下半は無釉である。23は砥石である。凝灰岩製で、下端は欠損後鋸で切断されている。

第5号溝跡出土遺物 (第41図13・14)

13は瀬戸美濃系の大皿である。透明釉が施さ



第41図 溝跡出土遺物

第22表 溝跡出土遺物観察表 (第41図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	片口鉢	(16.8)	8.1	(6.6)	E H I	30	良好	灰白	SD2 B-3G 瀬戸美濃	
2	陶器	灯明皿	9.6	1.8	4.4	H I	100	良好	灰	SD2 C-4G 瀬戸美濃 内外面鉄軸	
3	陶器	灯明皿	8.2	1.7	3.2	I K	100	良好	灰白	SD2 C-4G 外面煤付着 信楽	
4	陶器	碗	(11.0)	6.7	5.0	K	40	良好	白	SD2・3 広東陶「寿」字 呉須絵	
5	陶器	鉢	—	6.7	7.8	E I K	50	良好	灰白	SD2 B-3G 瀬戸美濃	
6	土師器	甕	(19.6)	5.3	—	A E H I K	20	良好	にぶい黄橙	SD2 B-4G 外面煤	
7	陶器	盃	6.9	4.6	2.8	K	70	良好	白	SD3 C-4G 肥前系磁器 呉須絵	
8	陶器	盃	(7.0)	3.9	2.7	K	60	良好	白	SD3 C-4G 瀬戸美濃 呉須絵	
9	陶器	碗	—	2.0	3.6	K	50	良好	白	SD3 C-4G 肥前系磁器「福」字	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備 考	図版
10	陶器	飯瓢具	—	4.2	3.6	K	95	良好	白	SD3 C-4G 瀬戸美濃興須絵	15-3 15-4 15-5
11	陶器	皿	9.6	1.7	3.5	H I	70	良好	褐灰	SD3 C-4G 内面鉄軸	
12	かわらけ	皿	8.4	1.9	4.2	C H I K	95	良好	にぶい橙	SD3 C-4G 回転系切り	
13	陶器	皿	—	2.1	(11.0)	H I	40	良好	灰白	SD5 底部墨書あり 瀬戸美濃 鉄絵	
14	土師器	台付甕	—	5.0	(10.0)	A E H I J K	25	普通	にぶい黄褐	SD5 外面部分的に煤 内面赤変	
15	土師器	壺	(19.3)	17.2	—	A E H I J K M	25	普通	にぶい褐	SD11 B-11・12G・C-12G・表採	
16	弥生	鉢	(11.2)	5.6	—	A E H I K	40	普通	にぶい黄橙	SD11 B-12G 内外面赤彩	
17	弥生	壺	—	2.4	6.8	A E H I J K	80	普通	にぶい黄橙	SD11 B-12G 円板状	
18	弥生	壺	—	2.3	5.2	A E H I J K	60	良好	にぶい褐	SD11 B-12G 円板状	
19	弥生	高坏	—	6.8	—	A E H I K	80	普通	にぶい黄橙	SD11 B-12G 外面全面・内面坏部赤彩	
20	弥生	高坏	—	5.0	—	A E H I J K	75	良好	にぶい橙	SD11 B-12G 内外面赤彩	
21	土師器	壺	—	6.8	—	A E H I J K	20	普通	にぶい赤褐	SD11 B-11G・C-12G 肩部刃物傷	
22	弥生	壺	—	6.9	(10.2)	A E H I K	20	普通	明赤褐	SD11 C-13G・表採	
23	石製品	砥石	長さ6.2cm	幅2.7cm	厚さ1.6cm	重さ40.1g	凝灰岩			SD3 C-4G	
24	鉄製品	煙管	長さ(6.3) cm	径0.9cm	重さ7.1g				SD2 C-4G 吸口 中に釘		

れ、鉄絵で唐草が描かれている。蛇の目高台で、高台内に墨書が見られるが判読できない。

第11号溝跡出土遺物 (第41図15～22)

15は複合部外面に単節 RL 1段、肩部に単節 RL 7段以上が施文されている。肩部の縄文は多段で

吉ヶ谷式の影響が感じられる。16は複合部外面単節 RL、下端に木口状工具による刻み目が施されている。高坏の坏部の可能性もある。21は古墳時代前期の壺で、肩部に刃物痕がつけられている。

5. 土壌

土壌は8基検出されている。第1号土壌は近世、第3～7号土壌は平安時代、第8・9号土壌は古墳時代前期と考えられる。概要は第23表のとおりである (第42図)。

第1号土壌は方形である。南側に長さ0.55m、幅0.80m、深さ0.20mの突出部が、東寄りに径0.25m、深さ0.20mのビットが設けられている。入り口部の施設の可能性がある。

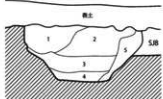
第23表 土壌一覧表 (第42図)

単位：m

遺構名	時期	グリッド	重複	軸方位	長さ	幅	深さ	断面形	平面形	遺物	備考
1号土壌	近世	B-2	SD1より新	N-81°-E	2.22	2.10	0.50	逆台形	方形	土師器甕 台付甕	突出部、ビットあり
2号土壌	欠番										
3号土壌	平安	C-8		南北又は東西	1.40	0.75	0.38	逆台形	円形	須恵器坏 土師器甕 土師器台付甕 近世焙烙 在地産鉢	
4号土壌	平安	B-8		N-87°-W	1.10	1.00	0.16	皿形	不整形円形	なし	ビット2ヶ所あり
5号土壌	平安	A・B-8・9		N-10°-E	0.95	0.95	0.10	皿形	長楕円形	土師器甕 古代須恵器甕	
6号土壌	平安	B-14	SR1より新	N-33°-W	0.80	0.40	0.35	逆台形	円形	平安時代須恵器蓋 土師器甕	
7号土壌	平安	C-14	SJ8, SR1より新 SK8不明	N-10°-E	1.00	0.94	0.35	逆台形	不整形	墨書須恵器 土師器甕	
8号土壌	古墳前期	B・C-14	SJ8, SR1より新 SK7不明	N-4°-E	1.15	1.20	0.90	上位が直立下位が逆台形	不整形円形	なし	
9号土壌	古墳前期	C-13		N-87°-E	1.52	0.75	0.58	箱形	隅丸方形又は不整形円形	土師器壺 甕 小型壺	



A 26.60m A'

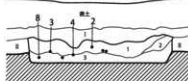


SK 8

- 1 黒褐色土 ローム粒子・小礫 (φ 1cm以下) 多量
- 2 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック (φ 1~5cm) 小礫 (φ 1~5cm) 多量
- 3 黒褐色土 ローム粒子・ブロック (φ 3~5cm) 小礫 (φ 1cm以下)・砂鉄屑多量
- 4 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (φ 10cm) 少量
- 5 黒褐色土



A 26.60m A'



SK 9

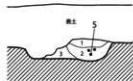
- 1 黒色土 ローム粒子・暗褐色土粒子少量 焼土粒子微量
- 2 黒褐色土 ローム粒子・小礫 (φ 1cm) 微量
- 3 黒褐色土 2層に近似するが色調がわずかに明るい 焼土粒子微量

包合層

- I 黒褐色土 硬質
- II 黒色土 硬質

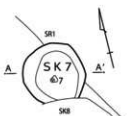


A 28.50m A'



SK 3

- 1 黒褐色土 ローム粒子多量 焼土粒子・灰褐色土粒子少量
- 2 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子多量
- 3 暗褐色土 ローム粒子多量

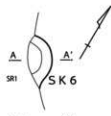


A 25.60m A'



SK 7

- 1 黒褐色土 ローム粒子少量 下位にかけて漸増

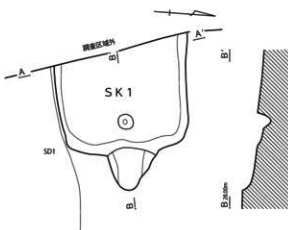


A 25.70m A'

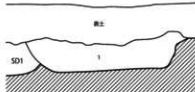


SK 6

- 1 黒褐色土 ローム粒子少量 小礫 (φ 1cm以下) 微量
- 2 黒褐色土 ローム粒子・ブロック 多量 焼土粒子微量

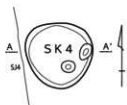


A 28.70m A'



SK 1

- 1 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック (φ 1~2cm) 多量 埋め戻しか

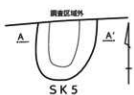


A 27.50m A'



SK 4

- 1 黒色土 ローム粒子・ロームブロック 多量 焼土粒子微量



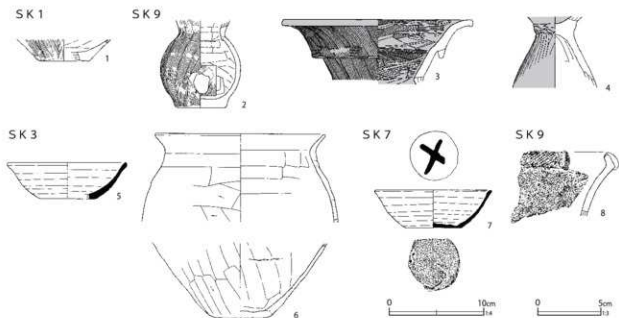
A 27.50m A'



SK 5

- 1 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック 少量 炭化物粒子微量





第43図 土壇出土遺物

第24表 土壇出土遺物観察表 (第43図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	甕	—	2.3	(5.2)	A I J K	30	普通	にぶい褐	SK1	16-1
2	土師器	小型壺	—	9.3	5.3	E H I	85	普通	にぶい橙	SK9 No.5 穿孔	
3	土師器	壺	(20.2)	6.8	—	A C E I J K M	20	良好	橙	SK9 No.2 外面赤彩 内面赤彩痕	
4	弥生	高坏	—	7.5	—	A C E H I K	70	普通	橙	SK9 No.4 外面赤彩	15-7
5	須恵器	坏	(12.5)	3.8	(6.2)	A E H I J K	25	良好	にぶい赤褐	SK3 No.3 南比金産 鳩山Ⅶ期	
6	土師器	甕	(18.0)	17.3	5.9	A E H I K	25	普通	明赤褐	SK3 二次加熱赤変 煤 破片多	15-6
7	須恵器	坏	(12.4)	4.0	6.0	E I J K	30	良好	暗灰黄	SK7 No.1 墨書「十」印 南比金産	15-8
8	弥生	壺	—	5.1	—	E H I J K	5	普通	にぶい橙	SK9 No.1 内外面赤彩 宮ノ台	

第3号土壇は、中層から焼土、平安時代の須恵器坏、土師器甕がまとまって出土している。

第7号土壇は、墨書された須恵器が下層から出土している。

遺物は、弥生時代中期、後期の壺、甕、高坏、古墳時代前期の壺、小型壺、台付甕、甕、古代の須恵器坏、甕、土師器甕、近世の焙烙、在地産の鉢が出土している。

1～3は古墳時代前期、4は弥生時代後期後半、5～7は平安時代、8は弥生時代中期後半である。

第1号土壇出土遺物 (第43図1)

1は刷毛目調整の底部である。輪台状を呈する。

第3号土壇出土遺物 (第43図5・6)

5は須恵器の坏である。酸化焰焼成。底径が口

径の2分の1で、口縁部は若干外反する。6は土師器の甕である。同一個体と考えられる破片が多く出土したが、接点不明瞭で図上で復元した。

第7号土壇出土遺物 (第43図7)

7は須恵器の坏である。底径が口径の2分の1以下で、口縁部は外反する。見込み部分に「十」の墨書が書かれている。

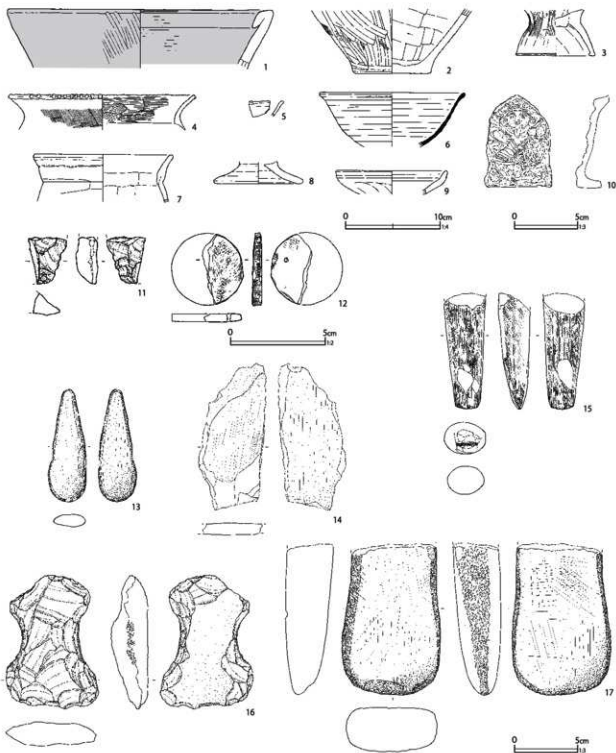
第9号土壇出土遺物 (第43図2～4・8)

2は古墳時代前期の小型壺である。胴部下位に径2cmの穿孔が外側から施されている。4は接合部に突帯が貼付されており、吉ヶ谷式と考えられる。脚部の内面はヘラナデ後更にナデを加え、平滑に仕上げられている。8は複合部外面に単節LRの縄文が施され、棒状浮文が貼付されている。

6. ピット

大西遺跡からは、B-7グリッドから1基、A-9グリッドから3基、B-4・8グリッドから各1基、計6基のピットが検出されている。径0.38~0.50m、深さ0.10~0.59mである。覆土は黒

褐色土でしまりがなく、遺物は出土していない。覆土の状態からみて、いずれも近世のものと考えられる。



第44図 グリッド出土遺物

第25表 グリッド出土遺物観察表 (第44図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	弥生	壺	(28.0)	6.3	—	ACEHIK	5	普通	にぶい橙	C-7G カクラン 内外面赤彩	
2	弥生	壺	—	6.9	8.4	AEGHIKM	60	普通	褐	西平表採	
3	土師器	台付甕	—	4.8	8.4	ACEHIJK	95	普通	にぶい赤褐	西平表採 外面煤 赤変	
4	土師器	甕	(19.6)	4.7	—	AEHJIM	15	良好	にぶい橙	B-4G 外面赤変	
5	灰釉陶器	埴	—	1.7	—	IK	5	良好	灰白	R-12G 輪花埴か 浜北窯産 K-90	
6	須恵器	埴	(15.3)	5.8	—	AEHJIK	20	良好	灰黄	C-17G 南北企業 駒山HⅧ	
7	土師器	甕	(14.6)	5.1	—	ACEHI	15	良好	にぶい赤褐	A-17G 内外面煤	
8	土師器	台付甕	—	2.3	(9.6)	ABHIK	40	普通	にぶい赤褐	A-17G	
9	かわらけ	坪	(11.8)	2.5	—	AHIK	10	普通	橙	A-11G 表採	
10	土製品	恵比寿様	高さ7.3cm 厚さ1.0cm	幅4.5cm 重さ46.9g	—	HIK	50	良好	にぶい黄橙	西平表採	16-3
11	石製品	剥片	長さ2.5cm	幅2.1cm	厚さ1.2cm	重さ4.2g	黒曜石	—	SR1F	上半左半欠損	16-8
12	石製品	有孔円板	長さ3.7cm	幅2.3cm	厚さ0.5cm	重さ5.1g	孔径0.15cm	緑泥石	SD1	B-3G 全体の1/2ほど欠損	16-8
13	石製品	砥石	長さ8.9cm	幅3.1cm	厚さ1.0cm	重さ36.2g	雲母片岩	—	B-17G	—	16-8
14	石製品	砥石	長さ11.6cm	幅5.5cm	厚さ1.0cm	重さ91.4g	緑泥片岩	—	SJ7	全面欠損	16-8
15	石製品	柱状石斧	長さ9.2cm	幅3.3cm	厚さ2.5cm	重さ95.4g	角閃岩	—	SJ6	上半部欠損	16-8
16	石製品	打製石斧	長さ10.7cm	幅7.3cm	厚さ2.9cm	重さ230.5g	頁岩	—	SD3	C-4G	16-8
17	石製品	磨石	長さ12.1cm	幅7.9cm	厚さ3.85cm	重さ587.5g	閃緑岩	—	—	西平表採 上部欠損	16-8

7. グリッド出土の遺物

大西遺跡では、確認面直上の包含層から、縄文土器、弥生土器、古墳時代前期の土師器、平安時代の須恵器、土師器、灰釉陶器、中近世の陶磁器、かわらけが出土している。特に谷にかかる調査区東側からの出土が多い。

第44図 1・2は弥生時代中期後半の壺である。3・4は古墳時代前期のものである。3はホソ接合で、胴部側は剥離しており臍の表面が見えている。4は端部に木口状工具による正面からの押捺が施されている。5～8は平安時代のものである。5は灰釉陶器の埴で、輪花埴の可能性がある。6は螺旋状の開裂が見られる。7は小型で台付甕の可能性がある。胴部外面は刀子によるケズリが施されている。9・10は中近世のものである。9のかわらけは体部外面に指ナデが施されている。10は素焼きの土製品の恵比寿様である。

11～15は石器、石製品である。11は黒曜石製の二次加工剥片である。剥片剥離後、縁辺が加工されている。縁辺は摩滅している。縄文時代。12は緑泥石製の有孔円板である。表面には多方向の擦

痕が認められる。裏面は1方向の擦痕のみで素材剥片がそのまま利用されている。孔は片面穿孔後、極細の角棒を中に何度も通し、最終的に多角形を呈している。側面は縦方向に削られた後、一定の単位で横方向に研磨されている。古墳時代中～後期。13は、雲母片岩製の砥石である。両側縁は鈍い両凸刃状に作られている。縄文時代。14は、緑泥片岩製の砥石の破片である。表面は使用により平滑である。縄文時代。15は、角閃岩製の柱状石斧で、刃部幅が狭い所謂ノミ形石斧と呼ばれるものである。上半部は欠損している。全体に敲打と研磨によって丁寧に整形され、光沢がある。刃部は直刃である。繰り返し使用され、潰れている。縄文時代。16は、頁岩製の打製石斧で、分銅形である。分割線は素材とし、風化が著しい。縄文時代中期後半。17は、閃緑岩製の磨石である。定角式の磨製石斧に近いが、刃部が鈍く石材が脆い。磨製石斧からの転用とも考えられる。両側縁は敲打で整形される。表裏平坦面は使用のため平滑である。縄文時代。

VI 調査のまとめ

1. 調査の成果

代正寺遺跡第8次、大西遺跡第13次の調査では、弥生時代中期後半から近世にわたる数多くの遺構・遺物が検出された。

代正寺遺跡第8次調査では、弥生時代中期後半の住居跡2軒、方形周溝墓1基、溝跡2条、土壇1基、古墳時代前期の住居跡1軒、中世の土壇1基、近世の溝跡1条、土壇5基が検出されている。

ほとんどの遺構が部分的な検出にとどまり、全体を明らかにできた遺構はほとんどないが、弥生時代中期後半については、次のような新たな知見を得た。

弥生時代中期後半の住居跡、方形周溝墓は、東側に接する当事業団で実施した国道407号バイパスの調査区検出の同時期の遺構とほぼ同一の軸方向であり、連続する集落域とすることができる。また、調査区西側の谷にかかる位置から検出される第3号溝跡は後述するように環濠の可能性が考えられる。

大西遺跡第13次調査では、弥生時代後期後半の住居跡1軒、古墳時代前期の住居跡4軒、方形周溝墓1基、溝跡2条、土壇2基、平安時代の住居跡3軒、土壇5基、中世の井戸跡1基、近世の溝跡10条、土壇1基が検出されている。

今回の調査では、特に平安時代の遺構・遺物に関して顕著な成果が得られた。

9世紀後半から10世紀にかかる時期の第6・7号住居跡は、双方から灰釉陶器が出土している。特に第7号住居跡からは、緑釉陶器の輪花埴、埴、灰釉陶器の埴、段皿、皿、長頸瓶、鉸具、「大田」の刻書がある石製紡錘車、多量の土師器、須恵器が出土しており、注目される。中でも「大田」の刻書紡錘車は、後述するように本遺跡と周辺遺跡との関係を具体的に示す資料と考えられる。

2. 代正寺遺跡の溝跡(環濠)について

代正寺遺跡の今回の調査では、調査区の西端の谷にかかる箇所から、弥生時代中期後半の第3号溝跡が検出され、覆土中から多量の遺物が出土している。他の遺構と離れた斜面にあること、さらに多量の遺物がまとまって出土することから推して、集落を囲う環濠である可能性が考えられる。

県内の環濠については、自然堆積の覆土で、中層から遺物はまとまって出土している例が多く、断面形は中期では逆台形か箱葉研形が多いという特徴が、鍋持和夫(鍋持1988・1991)、小出輝夫(小出2006)両氏によって指摘されている。本遺跡第3号溝跡は、そのいずれとも合致している。

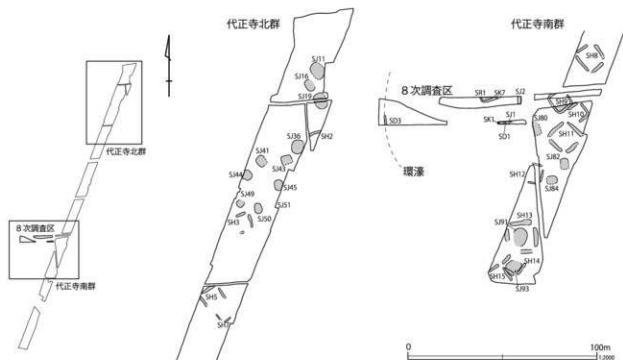
本溝跡同様の斜面に造られた環濠は、坂戸市木曾免遺跡でも認められ、斜面上の平坦地では住居跡13軒、方形周溝墓3基等が検出されている(篠田2008)。

代正寺遺跡の国道407号バイパスの調査区では、弥生時代中期後半宮ノ台式期の集落が、大きく南北の2群に分かれることが松本完氏によって指摘されている(松本2003)。この遺跡が環濠とすると、対応する集落は、南側の集落になる。住居跡と方形周溝墓が混在しているが、集落域から墓域への変遷が窺える。

今回の調査における住居跡(SJ1・SJ2)、方形周溝墓(SR1)は、南側の一群と同一の軸方向で、その一部と考えられる。集落全体の様相は不明だが、相当の規模の集落になると考えられる。仮に第3号溝跡が環濠であるならば、環濠集落としての評価も今後求められるであろう。

また、未報告だが、代正寺遺跡北東の東形遺跡は弥生時代後期、吉ヶ谷式の環濠集落の可能性がある(宮島2009)。

以上のように、高坂台地の東側には、中期後半から後期の代正寺北群、南群、東形、大西の遺跡



第45図 代正寺遺跡宮ノ台式期の集落

が密集していることになる。しかも、その内二つは環濠集落の可能性が考えられる。こうした様相は、坂戸台地北側の越辺川流域の遺跡群や、大宮台地南東部のさいたま市から川口市の芝川流域の遺跡群の様相に相通ずると考えられる。

今後、両遺跡群との比較により、代正寺遺跡をはじめとする高坂台地の宮ノ台式期の遺跡群の位置付けを進める必要がある。

3. 大西遺跡の刻書紡錘車について

大西遺跡第7号住居跡からは、緑釉陶器、灰釉陶器、土師器、須恵器、鉄具等の鉄製品に加え、「大田」の刻書のある紡錘車が出土している。施釉陶器が多く、鉄製品も伴うことから、この「大田」の刻書は当住居跡の性格、あるいは居住者についての情報として検討する必要があるだろう。

施釉陶器や土師器、須恵器の年代から、この資料は9世紀後半段階と考えられる。

関東地方の古代における刻書紡錘車については、練川の例も含めた山添奈苗氏による集成（山添2002）、埼玉県資料についての宮瀧交二氏の

集成・検討（宮瀧2006）がある。

宮瀧氏の集成によれば、埼玉県内では42例の刻書紡錘車が出土している。それらは大きく仏像などを含む仏教関係のもの、神に対する願文、地名、人名に分けられる。こうした刻書紡錘車について宮瀧氏は、宗教的な内容が多いことから実用品ではなく、祭祀用具としての性格が強いと指摘され、人名や地名については、願主との関係を推定している。山添氏も、9世紀代については仏教との強い関係を指摘している。

大西遺跡の性格については、市教育委員会の報告を待たねばならないが、Ⅱ・Ⅲで述べたように、基壇の可能性のある遺構や勝呂庵寺系の瓦が出土していることから、寺院と密接に関係する集落と捉えておきたい。刻書紡錘車が祭祀用具であるか否か、現時点では定かではないが、大西遺跡の資料もその可能性があることを指摘しておきたい。

また、大西遺跡出土資料同様の、人名もしくは地名が刻書された例は、行田市小針遺跡、上里町若宮台遺跡などで認められる。「大田」と記された例は、鶴ヶ島市富士見一丁目遺跡の「大

田大部」(黒坂1998)、本庄市南大通り線内遺跡の「武蔵国児玉郡草田郷戸主大田マ身万呂」(増田1987・1989・1991)の2例が知られている。前者は8世紀中葉、後者は9世紀前半で、本遺跡同様堅穴住居跡からの出土である。

本遺跡出土資料の「大田」も、上記2遺跡同様に、大田部を示すものであろう。

大田部は田部と同様、元来屯倉の田地の開発や耕作を職掌とした職業部民である。県内各所の、

古代の中核的な遺跡でその存在が確認されることから、屯倉の存在は別として、主要な水田の開発や管理に深くかかわっていたと考えられる。

大西遺跡の北側に広がる城敷・反町遺跡周辺は、高坂条里の存在が伝えられている。直接の関係は不明ながら、大西遺跡に存在した大田部も、その開発、管理、耕作に携わっていた可能性が考えられる。

引用・参考文献

- 赤熊浩一 2011『反町遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第380集
井上 肇 1980『根平』埼玉県遺跡発掘調査報告書第27集
今泉泰之ほか 1974『駒堀』埼玉県遺跡発掘調査報告書第4集 埼玉県教育委員会
今泉泰之ほか 1974『田木山・弁天山・舞台・宿ヶ谷戸・附川』埼玉県遺跡発掘調査報告書第5集 埼玉県教育委員会
江原昌俊 1993『岩鼻遺跡(第2次)』東松山市文化財調査報告書第21集 東松山市教育委員会
大谷 徹・宅間清公 2006『杉の木道跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第323集
大塚 実他 1988『八幡・原山・古吉海道』東松山市文化財調査報告書第17集
柿沼幹夫・佐藤幸恵・宮島秀夫 2008『岩鼻式土器から吉ヶ谷式土器へ』『国史館考古学第4号』
加藤恭朗・北堀彰男・柳 理 1988『坂戸市道跡群発掘調査報告書第1集』坂戸市教育委員会
加藤恭朗 2001『終遺跡』終遺跡発掘調査報告書Ⅰ 坂戸市道跡発掘調査団
金井塚良一 1968『番清水道跡調査概報』埼玉県道跡調査会報告第1集
金井塚良一・渡辺久生 1981『東松山市下寺前道跡発掘調査報告』『台地研究No.21』台地研究会
菊地 真 2007『西浦・野本氏館跡/山王裏・銭塚』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第340集
栗原文蔵・野部徳秋・今泉泰之 1973『岩の上・糠子山』埼玉県遺跡発掘調査報告書第1集 埼玉県教育委員会
黒坂祐二 1998『富士見一丁目遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第189集
齋藤和夫 1988『埼玉Ⅲ』『弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題Ⅱ』埋蔵文化財研究会・東海埋蔵文化財研究会
齋藤和夫 1991『関東地方の環濠集落(覚書)』『埼玉考古学論集』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
小出輝夫 2006『環濠は戦争用遺構か』『古代第119号』早稲田大学考古学会
酒井清治 1982『緑山道跡出土の瓦一勝呂庵寺の系譜の中で』『緑山道跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第19集
坂本和俊・金子彰男 1986『諏訪山29号墳』『埼玉県考古学調査報告書』埼玉県史編さん室
佐藤幸恵 2012『東松山市高坂古墳群の調査』『第45回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会
篠田泰輔 2008『木曾曾遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第352集
鈴木孝之 1991『代正寺・大西』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第110集
谷井 彪 1973『山田道跡・相模場道跡』埼玉県道跡調査会報告第18集 埼玉県道跡調査会
富田和夫 1992『稲荷前道跡(A区)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第120集
福田 聖 2012『反町遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第393集
増田一裕 1987・1989・1991『南大通り線内遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告書第9集
松本 完 2003『後期弥生土器形成過程の一例』『埼玉考古』第38号
宮島秀夫 1990『下寺前道跡(第2次)』東松山市文化財調査報告書第19集 東松山市教育委員会
宮瀬交二 2006『刻書紡錘車からみた日本古代の民衆意識』『古代の信仰と社会』国史館大学考古学会 六一書房
山添余苗 2002『線刻入り紡錘車から見た古代地域社会』『土壁第6号』考古学を楽しむ会
山本 禎 1991『山王裏・中原道跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第98集
山本 禎 1995『山王裏道跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第167集
山本 禎 1997『山王裏・上川入・西浦・野本氏館跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第184集
山本 靖・富田和夫 2010『銭塚Ⅱ/城敷Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第369集